

辻 遺 跡

——第3次発掘調査報告——

1991年

立山町教育委員会

序

文化財は祖先の営みを私達に伝えてくれるものであり、過去のみならず現在の文化を理解するためにも重要なものです。中でも埋蔵文化財はその土地に深く関係しており、郷土をよりよく知るための鍵となるものです。

このたび調査の行われた辻遺跡は、過去の調査で弥生時代から中世までの資料が多く出土しており、特に昨年出土した木簡は、奈良時代の地方行政状況を明らかにする新資料として注目されました。

今回の調査でも、県内では数少ない弥生時代後期前葉の土器がまとめて出土し、土器編年の研究に新たな見地を開いてくれることが期待されます。

この報告書がより多くの方々に活用され、地域の歴史と文化的理解に役立てば幸いです。

最後に、調査に際してご援助いただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、調査にご協力いただいた地元や諸方の皆様に衷心より感謝いたします。

1991年3月

立山町教育委員会

教育長 金川 正盛

例　　言

1. 本書は、平成2年度に国庫補助金及び県費補助金の交付を受けて実施した、富山県中新川郡立山町辻遺跡緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査期間は、平成2年5月7日～8月3日までの延35日である。発掘面積は約660m²である。
　調査期間中は、地権者をはじめ地元の方々から多くの御協力を得た。記して謝意を表します。
3. 調査事務局は立山町教育委員会におき、社会教育課主事森秀典が事務を担当、社会教育課長松井哲男が総括した。
4. 調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主事森秀典、立山町教育委員会嘱託調査員山㟢典子、同川端幸江である。
5. 調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表します。
　富山大学助教授宇野隆夫、石川県教諭四柳嘉章、橋本正・山本正敏、狩野睦・池野正男・酒井重洋・久々忠義（以上富山県埋蔵文化財センター）、上市町教育委員会主事高慶孝
6. 遺物整理・実測・製図は、森・山㟢・川端が中心となり、瀬戸智子・葛山拓也・野村祐一・河合君近・渡部克昌（富山大学学生）が協力した。
7. 本書の編集・執筆は森・山㟢が担当した。執筆分担は各文末に記した。
8. 遺物写真的縮尺はそれぞれに記した。

凡例

1. 遺物実測図中のスクリーントーンは、次のことをあらわす。



赤影

目 次

I	遺跡の位置と周辺の遺跡	1
II	調査に至る経緯	1
III	調査の概要	3
1.	立地と層序	3
2.	遺構	3
3.	遺物	6
(1)	縄文時代の遺物	6
(2)	弥生時代の遺物	6
(3)	奈良・平安時代の遺物	18
(4)	中世以降の遺物	19
IV	調査成果	24
1.	弥生時代の遺物について	24
2.	中世の遺構について	27

写真図版

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図	遺跡周辺の地形図	4
第3図	調査区区割図	5
第4図	調査区全休図及び土層図	
第5図	遺物実測図 縄文土器	7
第6図	遺物実測図 弥生土器	8
第7図	遺物実測図 "	9
第8図	遺物実測図 "	10
第9図	遺物実測図 "	11
第10図	遺物実測図 "	12
第11図	遺物実測図 "	13
第12図	遺物実測図 ヘラ状土製品・石器	14
第13図	遺物実測図 奈良時代以降の遺物	18
第14図	遺物実測図 穴-01出土珠洲焼	21
第15図	遺物実測図 穴-01出土漆皿	22
第16図	遺物実測図 穴-01出土木製品	23
第17図	土器ダマリ出土土器群	26
第18図	周辺の遺跡	27
第19図	辻遺跡中世遺構位置図	28
第1図①	弥生土器観察表	30
第1図②	弥生土器観察表	31
第1図③	弥生土器観察表	32
第1図④	弥生土器観察表	33

I 遺跡の位置と周辺の遺跡

立山町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地上に拓けた町である。西は富山市、東は長野県大町市に接し、東西約43km、南北約21km、面積は308km²である。地勢は、三角州や扇状地から河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらには山岳高地にまでおよぶ多様な地形が、標高約10mから3,000mにかけて展開している。今回調査を行った辻遺跡は、町の北東部新川地区に所在する。このあたりは、大地形的には常願寺川扇状地扇端部湧水帯にあたり、そこに柄津川・白岩川などの中小河川が流入して、三角州・小支谷・自然堤防等の複雑な地形を形成している。辻遺跡は、この柄津川と白岩川に挟まれた微高地上に位置する。

周辺には、縄文時代から近世に至るまで、きわめて多数の遺跡がほぼ切れ目なく存在する。

これらの遺跡の中で辻遺跡に関連があるものとしては、江上A（弥生時代中～後期）、江上B（弥生時代中期～古墳時代前期）、中小泉（弥生時代中～後期）、正印新（弥生時代中期～古墳時代）、日中源兵衛櫻（弥生時代後期～古墳時代前期）、藤塚古墳、高原早稲田（弥生時代～近世）、上木窓跡群（奈良時代～平安時代中期）、泉留置（弥生時代～近世）、寺田正沼（弥生時代～近世）、泉下役（古代～近世）、浦田柳町（弥生時代～近世）、浦田跡（繩文時代～近世）、浦田西反（弥生時代～近世）、浦田馬渡（古代～近世）、稚児塚古墳、寺田三十刈（弥生時代～近世）、寺田越前（弥生時代～近世）、塚越古墳、利田横枕（繩文時代～近世）、利田堀田（古代～中世）、利山高見（古代～中世）、総曲輪（古代～近世）、五郎丸（繩文時代・古代～近世）、日水（繩文時代～近世）、二ッ塚経塚（中世？）、大戸塚（中世）、前田経塚（中世）、弓庄城跡（鎌倉時代～戦国時代）の各遺跡がある。（森）

II 調査に至る経緯

辻遺跡は、昭和31年水田整地時に発見され、「立山町史」には辻西古原遺跡と記されている〔安田 1977〕。なお、この時出土した遺物の一部は、立山風土記の丘資料館に保管されている。

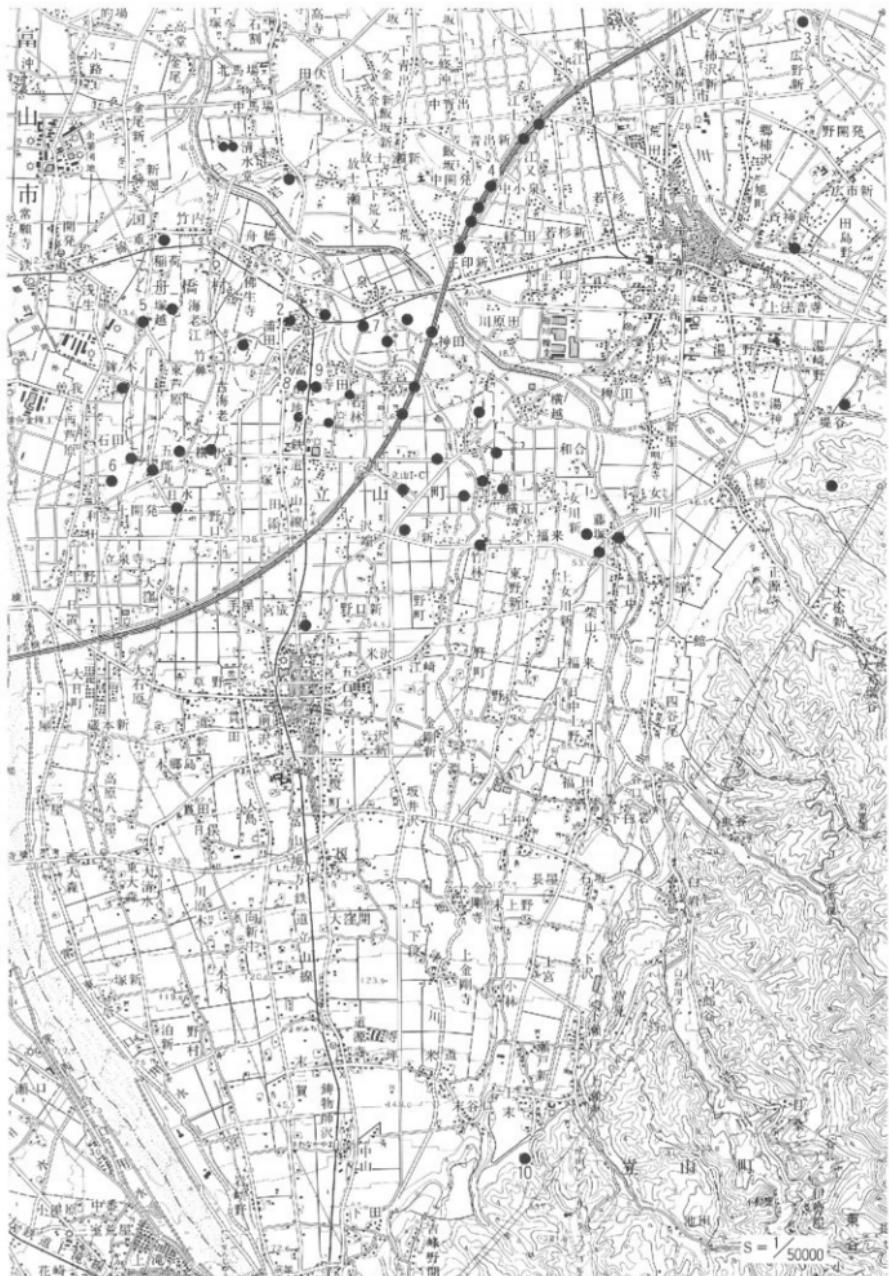
昭和53年、は場整備に先立って予備調査が行われ、弥生時代から平安時代にかけての遺物が多量に出土した。これにより、微高地のほぼ中央部、東西200m、南北200mの地域に遺物が集中していること、南西側には奈良・平安時代の遺物が多く、東側には弥生・古墳時代の遺物が多いこと等が判明した〔酒井 1979〕。

昭和61年度調査（第1次）。昭和60年、辻跡地内において工場建設の申請が提出され、試掘調査の結果、溝などの遺構と多数の遺物を検出した。このため、昭和61年度に国庫補助をうけ、工場敷地約1,200m²を対象として、記録保存調査を実施した。この調査で、中世（鎌倉時代）建物の周溝と考えられる幅約3mの大溝が検出され、同地に中世の城館又は集落の所在したことが判明した。また、溝からは多量の木製品が、包合層からは極めて大量の弥生土器・土師器が出土し、貴重な資料が提供された〔立山町教委 1987〕。

平成元年度調査（第2次）。昭和63年秋、個人住宅建設に伴う農地転用申請が提出され、試掘調査の結果、土師質土器、木製品などの遺物を検出。第1次調査と同様、国庫補助をうけ、住宅敷地を対象として、記録保存調査を実施した。この調査では、8世紀前半の遺物と共に同時期の木簡が出土し、地方行政機構の新史料として注目された〔立山町教委 1990〕。

平成2年度調査（第3次）。平成元年冬、個人作業場建設に伴う農地転用申請が提出された。町教育委員会は12月20日に試掘調査を実施。多量の土師質土器や木柱片などを検出した。この結果をふまえ、富山県教育委員会、立山町教育委員会、工事主体者の三者により協議・調整が行われ、作業場敷地を対象として、立山町教育委員会が調査主体となり、国庫補助を受けて記録保存調査を実施することとなった。

発掘調査は、5月7日～8月3日の延べ35日間にわたって実施された。発掘面積は約660m²である。（山崎）



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡
1. 江邊跡 2. 浦田遺跡 3. 本江、広野新遺跡 4. 江上A遺跡 5. 塚越I遺跡 6. 利田
7. 横浜遺跡 8. 寺田川崎遺跡 9. 寺田正沼遺跡 10. 上木窓跡群

III 調査の概要

1 立地と層序

辻跡は、北陸自動車道立山I・Cの北東部約1km、立山町辻字西吉原に所在する。このあたりは、常願寺川扇状地扇端部の湧水地帯にあたり、さらに柄津川・白岩川という河川に挟まれた地形になっており、周囲は水田が広がっている。

追跡は、柄津川東岸の小支谷によって開拓された微高地上に立地する。この微高地は、南北約1km・東西約500mの広がりをもち、北にゆるく傾斜している。追跡の範囲は、昭和53年に行われた予備調査で、微高地のほぼ中央部に東西200m・南北200mにわたって広がっていることが確認されている。昭和63年には、今回調査区より南へ100mの地区で、平成元年には北東わずか数10mの地区で発掘調査を行い、それぞれ弥生時代の堅穴住居跡、奈良時代の土器・木製品などを検出した。標高は21~24mを測る。

層序は、第1層・耕作土（黒褐色土）、第2層・淡褐色土、第3層・暗青灰色土、第4層・青灰色土からなる。それぞれが粘質土から砂礫土までの変化を持ち、複雑な様相を示している。特に地表から約1m位までは、は場燃備の際のものと思われるカク乱をうけており、第4層と第3層の一部以外からの出土遺物は、縄文から近世までまとまりのないものとなっている。第4層については特に変化が激しく、粘質土・砂礫土・砂質土が何層にも重なりあってはいるものの、異質な上層との混ざりあいは確認されない。この第4層と第3層の一部が弥生土器の包含層である。調査区東壁付近は約50cm前後の耕作土の1層のみで標面を検出した。

2 造構

検出した造構は、弥生時代の溝2条、中世の穴1個である。

溝-01（第4図）

調査区東側、Y14区で検出した。南北に走る溝の北端部分にあたり、上面最大幅5.7m、下面最大幅3.3m、最深部の深さは1.0mを測る。断面形は「U」形で、覆土は粘質・砂質など多種の青灰色土からなる。

溝は南側が深く、北側へと浅くなっている。急に立ち上がって終っており、自然流路とは考えにくい。また、溝の西側に隣接して、幅2~5m、高さ50cm程度の砂利の堆積があり、溝と併に人工的造構の可能性が高い。

遺物は出土していないが、層位から、弥生時代後期に属すると思われる。

溝-02（第4図）

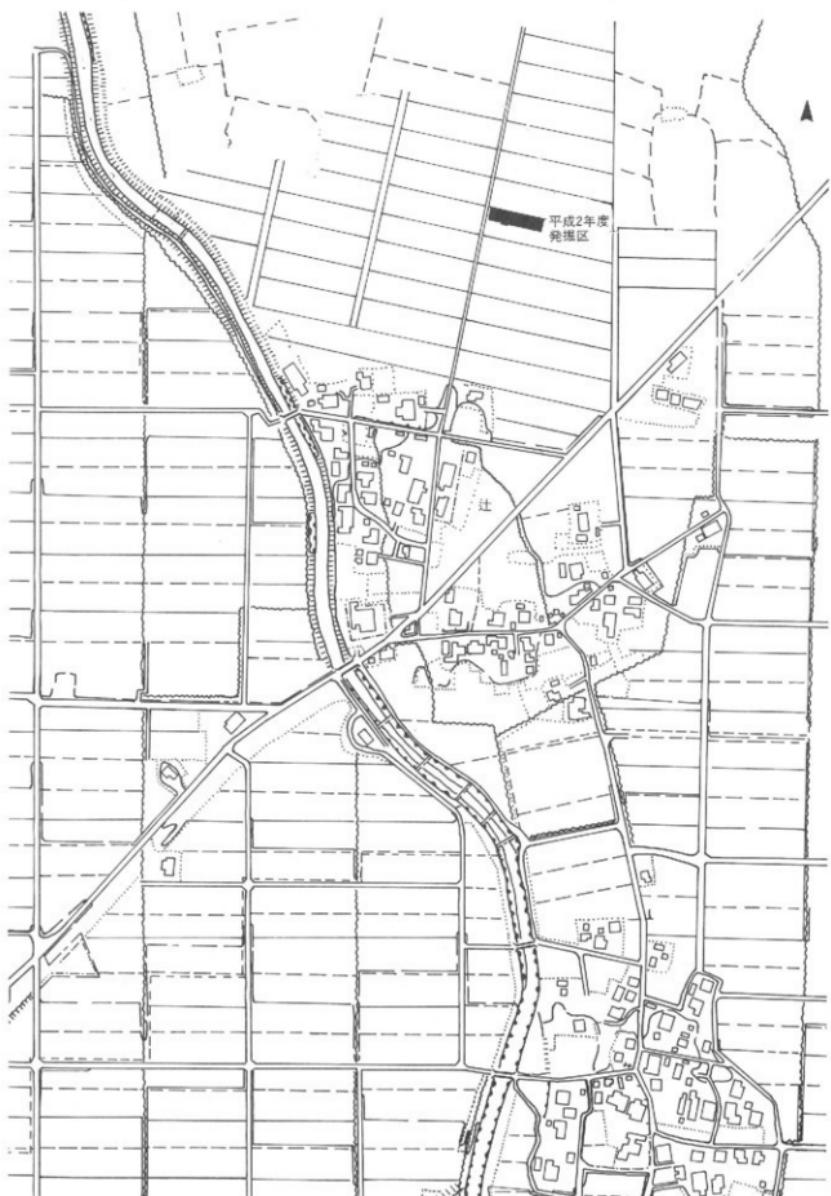
調査区西側を、南東から北西方向へとゆるく弧状に走る大溝で、X5 Y8区で東側から流れてくる小溝と合流している。地形・形態・覆土等から見て、自然流路と考えられる。覆土は、粘質・砂質など多種の青灰色土からなる。

遺物は、底面より少し浮いた位置から、後述する土器群（第6~9図）が出土している。出土状況は、幅1.3m程度の帯状をなして直線的に並び、レベル差もほとんど無い。また、復元できた個体も多く、一括性は高いといえよう。なお、この土器群を含む青灰色粘質土層は造構範囲外にも広がっており、明確に造構に伴う遺物とするには問題が残る。むしろ、造構上に堆積した包含層からの出土品と考えるべきであろう。ただし、溝の時期決定要素としては有効と考えられる。

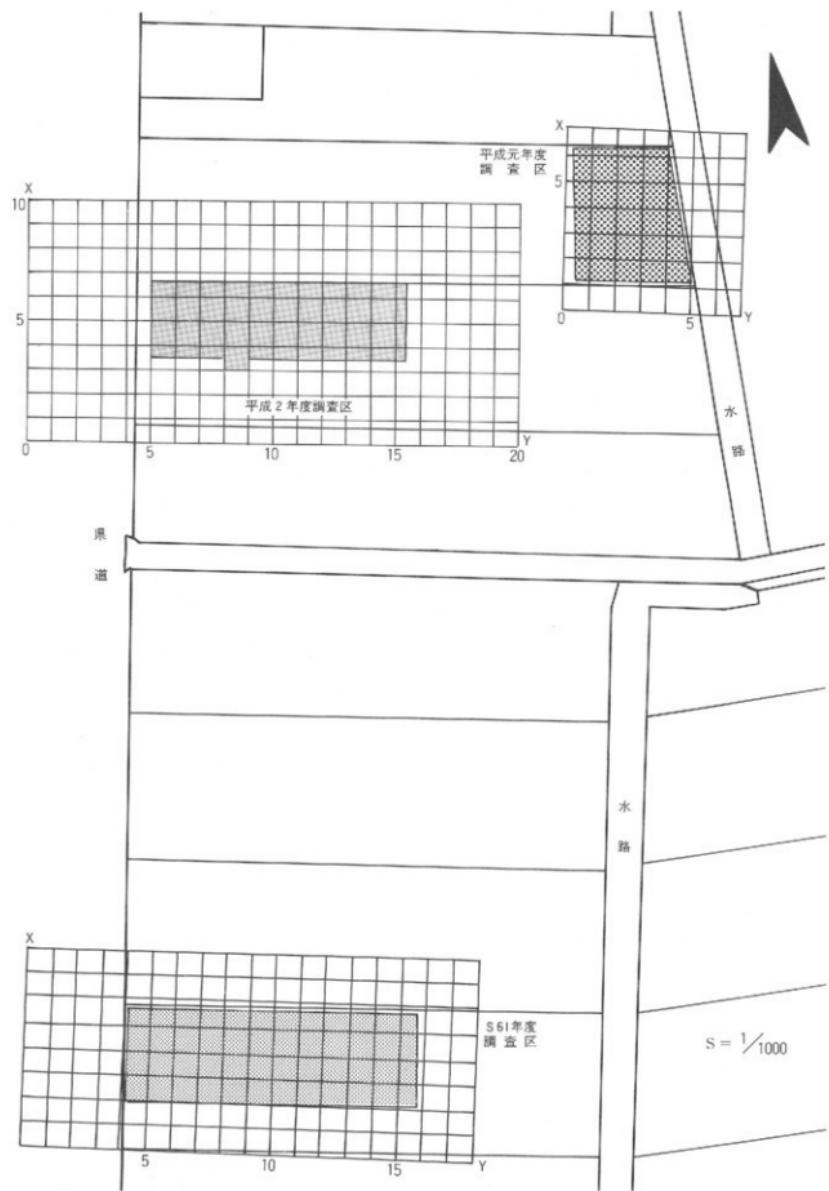
時期は、弥生時代後期初頭から前半にかけてと考えられる。

穴-01（第4図）

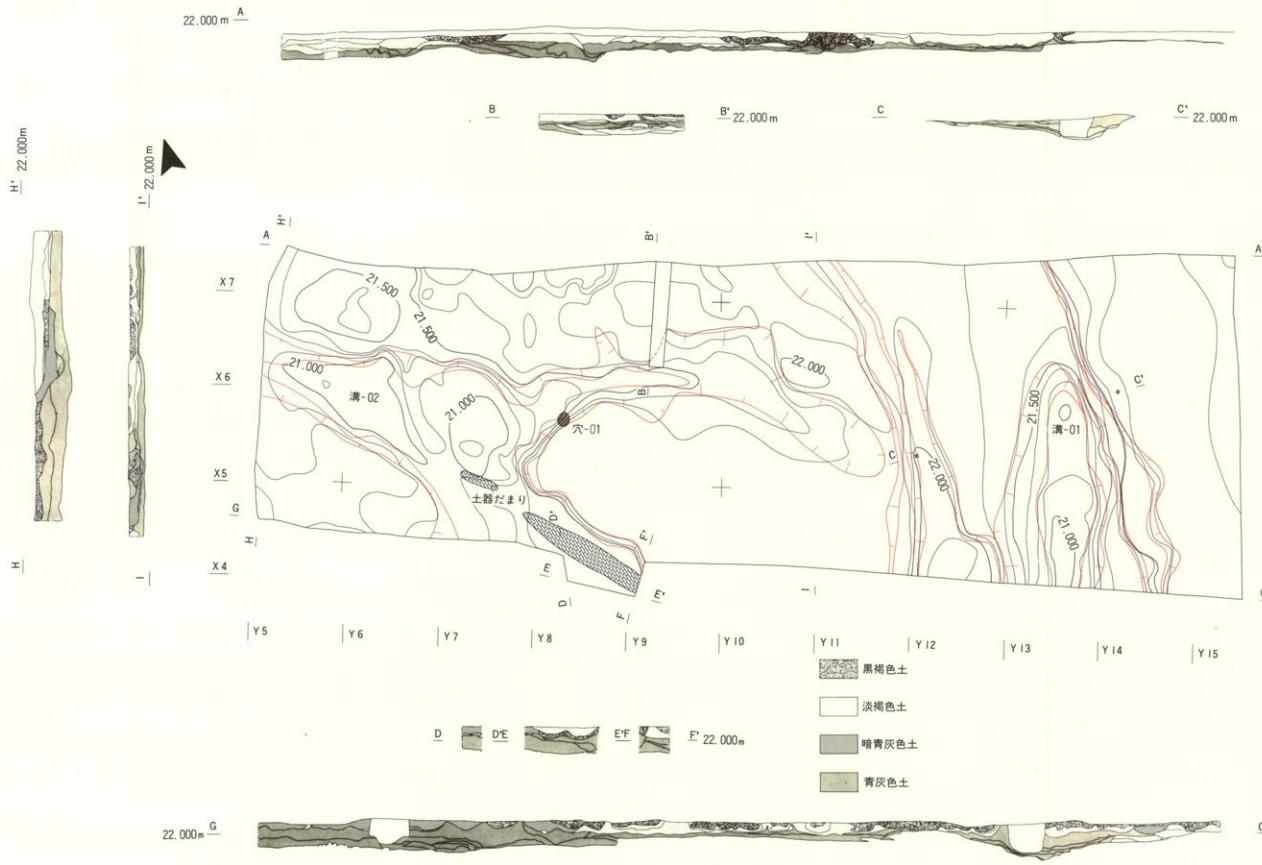
X5 Y9区において、青灰色粘質土の中に、径58cmの穴を検出した。覆土は、暗青灰色粘質土が単層で堆積しており、中から漆皿4点、曲物2点、曲物の底1点、珠洲大甕破片数点が出土した。



第2図 遺跡周辺の地形図



第3図 調査区区割図



第4図 調査区全体図及び土層図 (S=1/200)

3 遺物

遺物は、確實に遺構から出土したと言えるものはごく一部で、包含層からの出土が大半を占める。ただし、遺物の時期により、出土位置・層位には明らかな違いが認められる。

(1) 繩文時代の遺物（第5図）

縩文時代の遺物は、中期に属する土器がほとんどであり、調査区北西隅X 6・7 Y 6・7 区の淡褐色土層を中心に出土している。いずれの土器も小破片であり、表面なども磨耗したものが多いことから見て、柄津川の氾濫等によつて2次的に堆積したものと考えられる。

中期中葉（1～3・5～8・10～12・16）

1は、弱いキャリバー形の波状口縁深鉢で、口縁に4条の半隆起線を巡らせ、以下はR Lの縩文を横走させる。

2は、張りの弱い円筒形胴部に内溝気味の口縁部がつくもので、全面にL Rの縩文を縱走させる。

3・6は、口縁に平行に半隆起線を施し、口唇との間を狭い無文帯とする。

5は、波頸部に隆帶で玉抱三叉文を施し、胴上部は半隆起線で区画する。なお、玉抱三叉文の中は赤彩し、区画内は連續爪形刺突している。また、他の個体に比べて、胎土は緻密で白っぽい。

7・8は、隆帶と半隆起線で施文するもので、隆帶上には爪形文が施される。なお、10は、胎土から見て、8と同一個体と考えられる。

11・12・16は、半隆起線で施文された胴部及び底部の破片である。

中期後葉（9）

一点のみの出土で、隆帶上に貝殻腹縁の連続刺突を施す。串田新式に属するものである。

その他（4・13～15）

時期を特定できない一群である。4は、R Lの縩文を施した口縁部で、胎土は1・2に似ている。14は条纹文を、13・15は縩文を施した底部である。

(2) 弥生時代の遺物（第6～11図）

弥生時代の遺物は、ほとんどが調査区西側Y 6～9ラインにある青灰色土層から出土したもので、Y 10ライン以東からの出土はごく少ない。出土状況は、全般的に小破片での出土が多い中で、X 5 Y 8区からX 4 Y 9区にかけて、幅1.3m程度の帯状土器ダマリとでもいうべき地点があり（第4図）、ここからの出土遺物は復元個体の割合が高かった。土器以外の遺物には、石器・土製品が各1点ある。

土器は、全て包含層からの出土であるため、器種ごとに分類した。また、全形を知り得ない器種が多く、分類基準は主に口縁部の形態差によつた。

器種は、壺・甕・鉢・瓶・高杯・器台がある。

壺（第6図、第10図74～76、第11図106～108）

壺は、A・B₁・B₂・C₁～C₃・D₁～D₃・E₁・E₂・F₁～F₃・G・H₁・H₂。

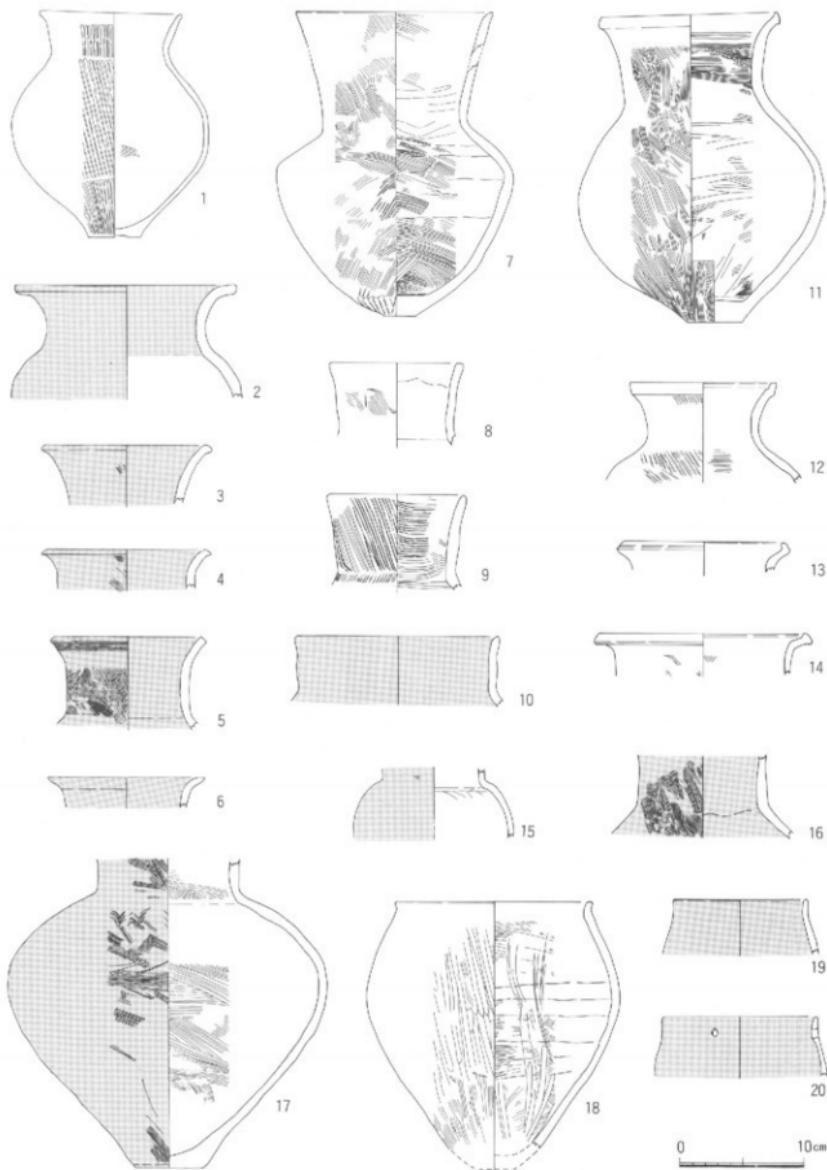
壺A（第6図1）球形に近い胴部に、直線的に外傾する口縁部が付くもので、底部は大きめの平底である。口縁部をヨコナデする以外、外面は全てヘラミガキを行う。

壺B（第6図2、第10図76、第11図106）B₁（2・76）張った体部に大きく外反した口縁部が付くもので、端面はほとんど横を向く。外面と口縁内面を赤彩する。B₂（106）大きく外反する口縁部で、端面は斜め上を向き凹線が1条施される。外面を赤彩する。

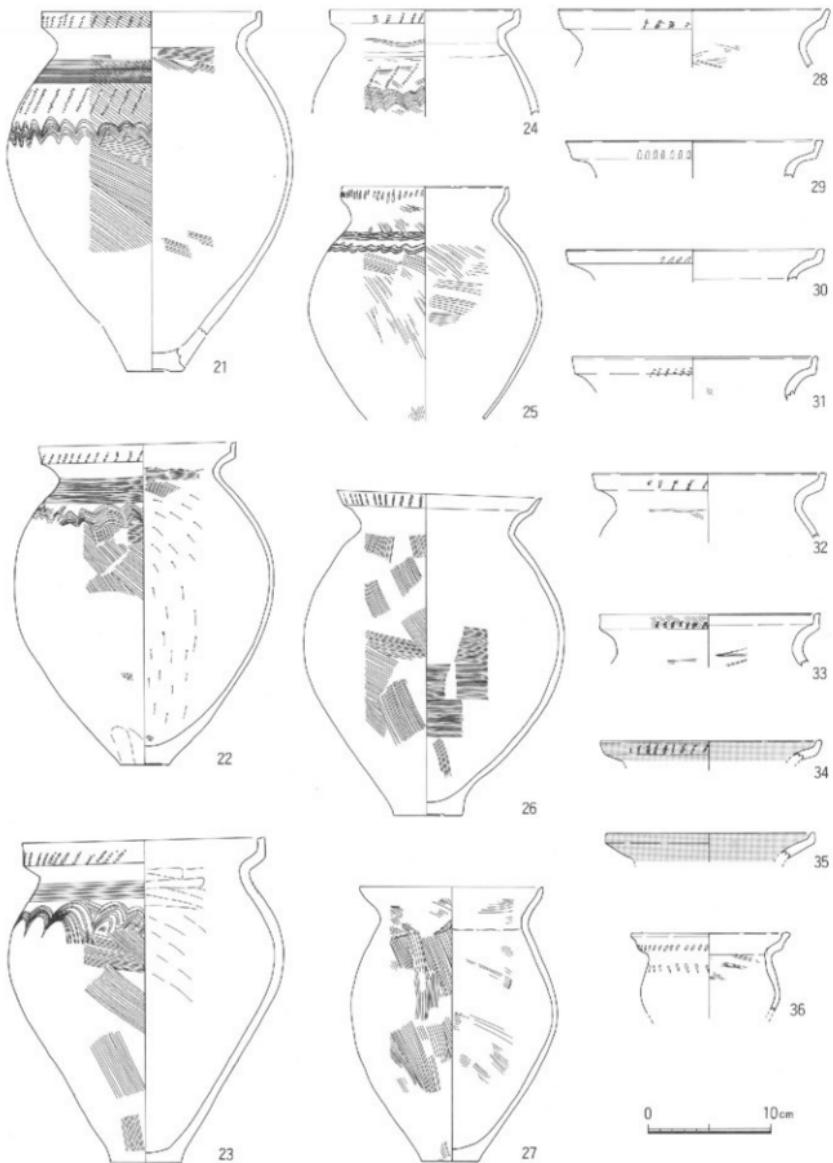
壺C（第6図3～6、第11図107）C₁（3）直線的にゆるく外反する口縁部で、端部を丸くおさめる。内・外面を赤彩する。C₂（4・5・107）ゆるやかに外反する口縁部で、端部はヨコナデにより面を持つ。内・外面を赤彩する。



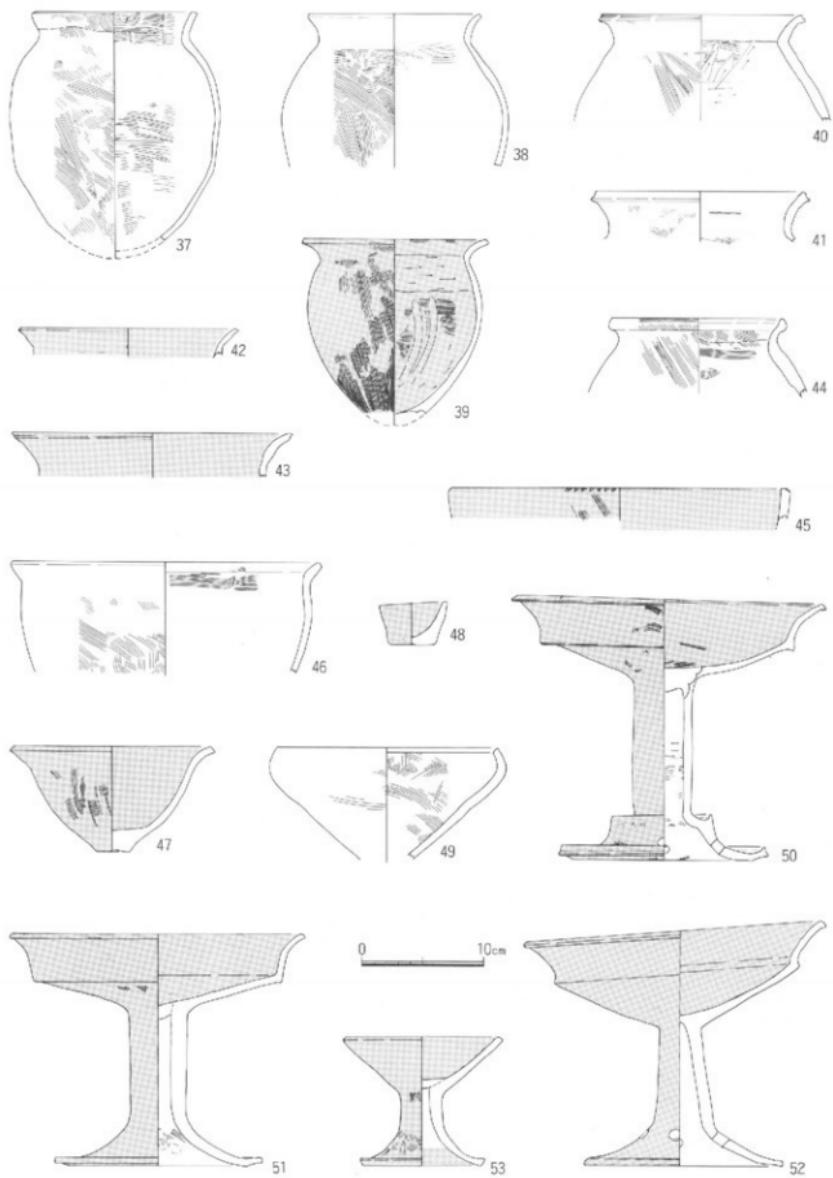
第5図 遺物実測図 包含層



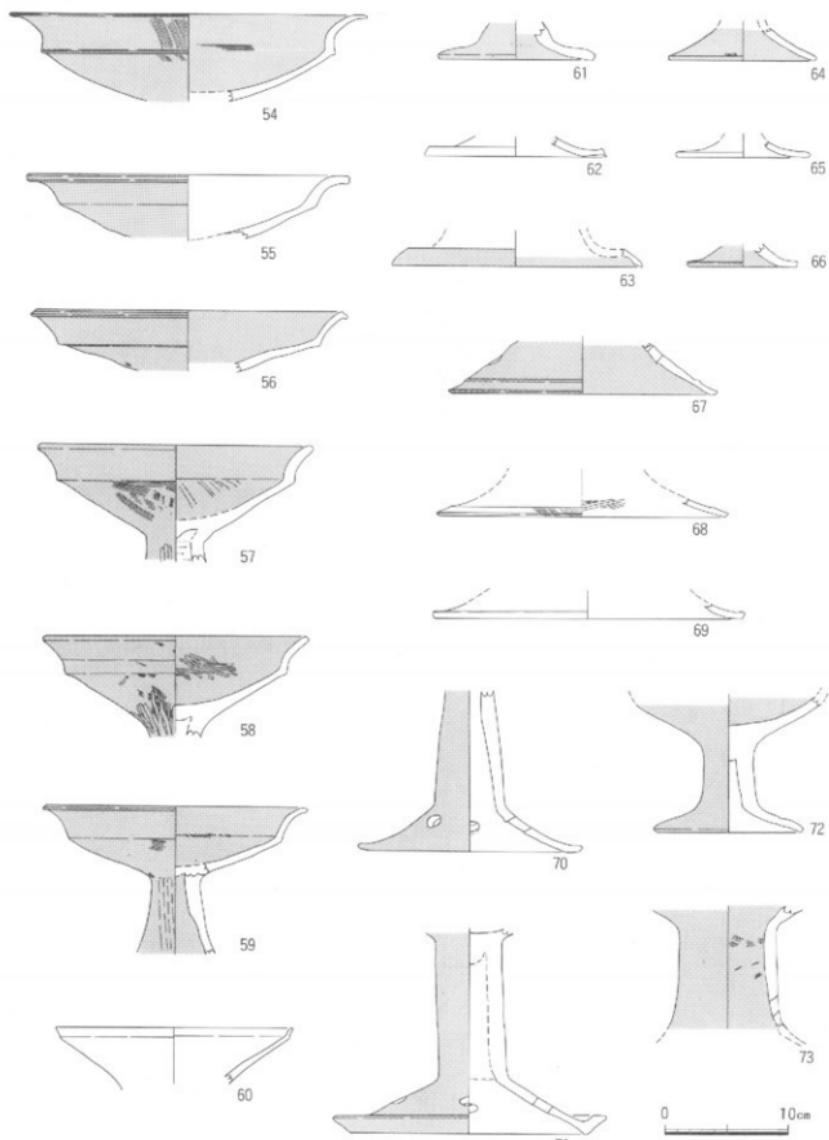
第6図 遺物実測図 土器グマリ



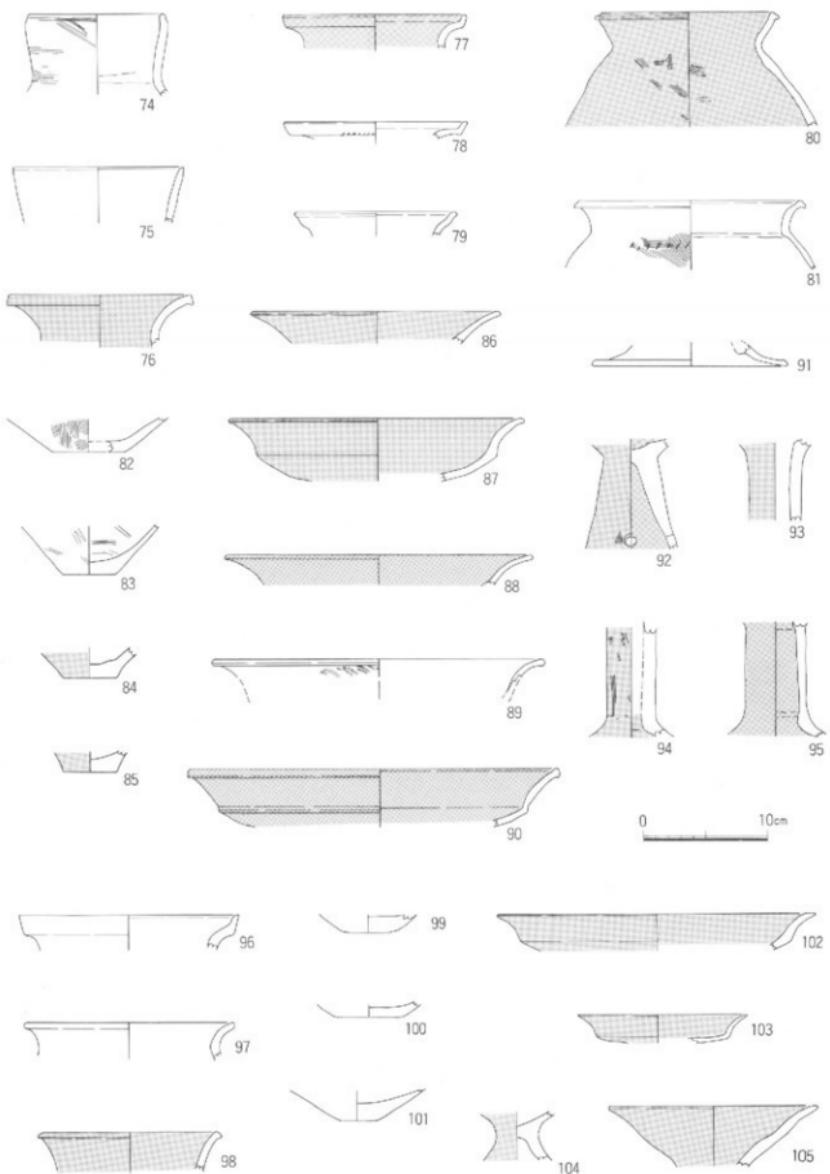
第7図 遺物実測図 土器ダマリ



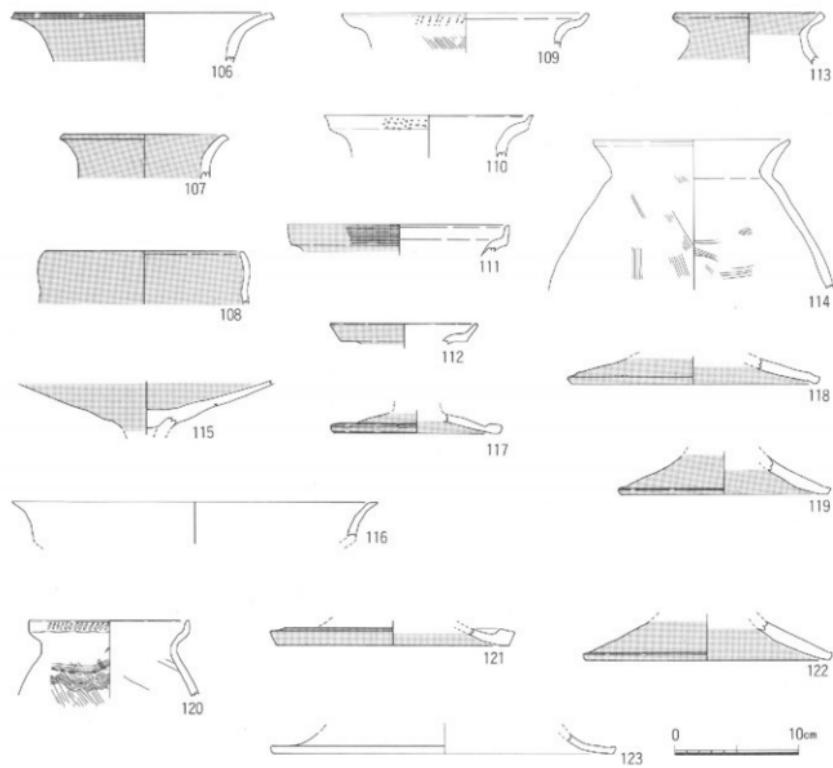
第8図 遺物実測図 土器ダマリ



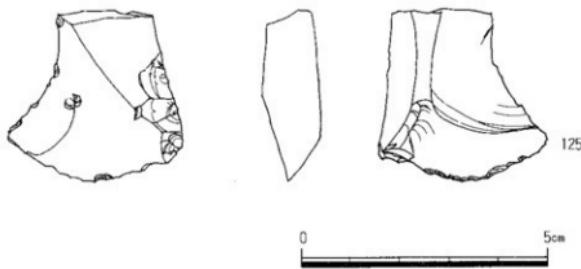
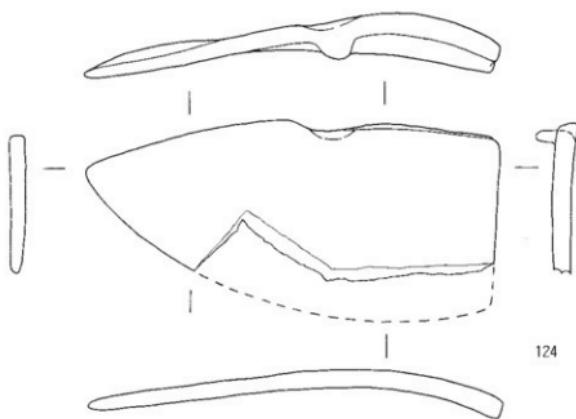
第9図 遺物実測図 土器グマリ



第10図 遺物実測図 74~95、青灰色土 96~105、暗青灰色粘質土



第11図 遺物実測図 106~119、黒褐色土 120~123、表採



第12図 遺物実測図 包含層

C₁(6) ゆるやかに外反する口縁部で、端部を尖り気味におさめる。内・外面を赤彩する。

壺D (第6図7~9、第10図75) D₁(7・75) 肩の張った胴部に、直線的に開く長めの口縁部が付くもので、端部には小さな面を持ち尖り気味におさめる。底部は小さめの平底である。D₂(8・9) 直線的に開く口縁部で、端部に面を持つ。9は内・外面に粗いハケ目を残す。

壺E (第6図10、第11図108) E₁(10) 口径に比べて短かい口縁が、まっすぐ立ち上がるものの。端部は丸くおさめる。内・外面を赤彩する。E₂(108) 口縁が端部で内湾するもので、内・外面を赤彩する。

壺F (第6図11~14) 受口状か、それに類似した口縁形態のものを一括した。F₁(11・12) 球形に近い胴部に、ゆるやかに外反する口縁部が付くもので、底部は大きめの平底である。口唇は上方につまみ上げている。F₂(13) 口唇を内側斜め上方向につまみ上げ、口縁外側に凹線を1条施す。F₃(14) 縫端部を上下方向に広げるものである。

壺G (第6図18) 内傾した口縁の端部を、直立気味におさめる無頬壺で、底部は平底になるものと推定される。外面はヘラミガキがなされる。

壺H (第6図19・20) 台付壺と推定されるものである。H₁(19) 口縁端部が内傾から短く直立するもので、内・外面を赤彩する。H₂(20) 口縁を内側に肥厚し穿孔するもので、内・外面を赤彩する。

壺 (第7図、第8図37~44、第10図77~81、第11図109~114)

壺は、A₁~A₄・B₁・B₂・C・D・E₁・E₂・F・G₁・G₂・H₁・H₂・I・J・K・Lがあり、出土量は最も多い。

壺A (第7図21~24・28~35、第10図77・78・96、第11図109・110・112・120) 受口状の口縁を持つもので、壺の主体をなすものである。A₁(21~24・28・31~34・96・109・110) 最大径を胴中位以上にもつ張りの強い胴部に、明瞭に屈曲する口縁部が付くもので、底部はやや大きめの平底である。口縁屈曲部外面に刺突列点文、胴上部に平行線文・波状文・刺突列点文等を施す。施文原体は東ねた竹クシ様のもので、5本1組の場合が多い。A(35・77・112) 口縁内・外面を赤彩するものである。A₂(29・30・120) 口縁屈曲部外面に連続ヘラ刻みがなされるもので、胴上部に平行線文・波状文を施す。A₃(78) 口縁屈曲部外面下端に連続刻みを施すものである。

壺B (第7図25・27) 口縁部が内湾して立ち上がり、屈曲による稜が明瞭でないもの。B₁(25) 口縁屈曲部外面に連続ヘラ刻みを、胴上部に平行線文・波状文を施す。B₂(27) 口縁の屈曲も頸部のくびれも弱く、外面はハケメ調整のみで無文。底部はやや大きめの平底である。

壺C (第7図26) 口縁屈曲部は斜め上方に大きく開き、外面にクシ状具で連続刺突文を施す。最大径を中位にもつ張りのある胴部に、やや大きめの平底が付く。

壺D (第11図111) あまり幅の広くない有段口縁で、5条の擬凹線を施す。外面を赤彩する。

壺E (第7図36、第10図79) S字状に近い口縁形態のもの。E₁(36) 口縁屈曲部外面と肩部に連続ヘラ刻みを施す。E₂(79) 屈曲は弱く無文である。

壺F (第8図37) 長めで少し張りの弱い胴部に、直線的で短い口縁が外傾して付くもので、底部は丸底になるものと推定される。口縁端面は雑に処理されており、粘土紐の継ぎ目を簡単にナテた感じである。

壺G (第8図38・39、第10図97・98) 張りのある胴部に外反する口縁部の付くものである。G₁(38・97) 口縁端部を丸くおさめるもの。G₂(39・98) 口縁端部に面をなすもので、39は小さめの平底になると推定される。

壺H (第8図40・41、第10図80、第11図114) 張りの弱い長めの胴部に、頸部で強く屈曲して外反する口縁部が付くもの。H₁(40・41・80) 口縁端面に1条の凹線を施すもので、80は内・外面を赤彩する。H₂(114) 端部を尖り気味におさめるものである。

壺I (第8図42・43) 口縁部が中ほどで肥厚するもので、S字状口縁の影響がうかがえる。

壺J (第8図44) 口縁部が外反した後、内湾して立ち上がるもので、端面を外側に肥厚させ、受口気味とする。

鑑K (第10図81) 外反する口縁端を下におし広げて面をとるもので、口縁部全体を内側に肥厚させ、肩部にはクシ状具による連続刺突が施される。

鑑L (第11図113) 短い口縁が直線的に外傾するもので、外面と口縁内面を赤彩する。他の器種の可能性も残る。

鉢 (第8図45~47)

鉢は、A・B・Cがある。出土量はごく少なく、各類1個体にすぎない。

鉢A (第8図45) 直線的に立ち上がる口縁部破片で、端部外縁を連続して刻む。内面を赤彩する。

鉢B (第8図46) 直立気味に内湾した体部から、口縁が短く外反するもので、端部は丸くおさめる。

鉢C (第8図47) 開き気味に内湾した体部から、口縁が短く外反する小型鉢で、小さい平底を持つ。内・外面を赤彩する。

瓶 (第8図49)

直線的に聞く体部が、口縁部で強く屈して内傾する。1個体のみの出土で、底部は無く、他器種の可能性も残る。

高杯 (第8図50~53、第9図54~72、第10図86~95・102~104、第11図115~119・121~123)

高杯は、A・B・C・D・E・E・F・G・G・H・I・I・J・K・L・M・Nがあり、出土量は鑑に次いで多い。赤彩品の比率も高く、表面の磨耗等によって不明のものを除いて、8剤に達する。

高杯A (第8図51) 体部は直線的に聞く、口縁部は直立から外反する。口縁部と体部の比は1:2程度である。脚部は円筒状の脚柱とハの字に聞く脚台からなり、端部は若干反らせる。杯部内面と外面を赤彩する。

高杯B (第8図52、第9図70) 脚部成形後に杯部をつけたす「組み合わせ法」で作られたものである。口縁部は屈曲して外反し、端部にはヨコナデで面をとる。脚は円筒状の脚柱とハの字に聞く脚台からなり、脚屈曲部に、52は4個、70は3個の円孔を穿つ。両個体とも、胎土は緻密で、他に比べて少し脆弱である。52は外面と杯部内面を、70は外面を赤彩する。

高杯C (第9図57~59) やや深めのロウト状体部に、短かく外反する口縁部が付く。口縁部と体部の比は1:3前後である。脚部は円筒状の脚柱であり、ハの字に聞く脚台が付くものと推定される。特徴的な調整としては、脚部外面と杯体部上位をヘラミガキする。全個体とともに内・外面を赤彩し、59は脚部内面も赤彩する。

高杯D (第9図60) 杯部破片。深めのロウト状体部に、ごく短い外反する口縁部が付く。他に比べて器壁がかなり薄く、焼成も良好である。体部内面はヘラミガキの後ナテ調整を行う。

高杯E (第9図54・55 第10図86~89・103) 杯部破片。E: (86~89・103) 深く内湾気味の体部に、外反した口縁部の付くもので、端部は丸くおさめることが多い。89以外は内・外面を赤彩する。E: (54・55) 口縁部が水平になるまで外反するもので、体部もE:よりは少し深めになる。54は端部を尖り気味におさめ、内・外面を赤彩する。55は外面のみ赤彩する。

高杯F (第8図53) 直線的に聞くロウト状の体部とラッパ状の脚部をもつ小型品で、杯部と脚部の高さがほぼ等しい。外面ハケメ、内面はナテ調整を行い、外面と杯部内面のほかに脚内面も赤彩する。

高杯G (第8図50、第9図56、第10図90・102、第11図116) G: (50・90) 口縁端部をヨコナデして面をとるもので、脚は棒状有段脚となり、脚端部は若干反らせる。50は内・外面とともにヘラミガキを多用し、外面と杯部内面を赤彩する。90も内・外面を赤彩する。G: (102・116) 杯部破片。口縁端に上向きの面をとるもので、102は内・外面を赤彩する。G: (56) 杯部破片。口縁端を外側に肥厚して面をとり、凹線を1条施す。内・外面を赤彩する。

高杯H (第9図72、第11図118) 全形を知り得るものはない。脚は円筒状の脚柱とハの字に聞く脚台からなり、端部は短くわずかに内側に屈する。杯部は残存部の形態から、楕形になるものと推定される。72は外面と杯部内面を、118は脚部内面を赤彩する。

高杯 I (第9図64・66・68・69、第10図91、第11図119・122・123) ハの字状で外反気味に開く脚部破片を一括した。I₁ (64～66) 端部を丸くおさめる小型品で、64・66は内外面を赤彩する。I₂ (69・91・123) 端部に面をとるもので、赤彩品はない。I₃ (119・122) やや厚手の造りで、端部に面をとる。内・外面を赤彩する。

高杯 J (第9図67・68、第11図121) 脚部破片。ハの字に開く脚台部で、端部に粘土帯を貼付して肥厚させる。なお、67・68では粘土帯が剥離してしまっている。67・121は内・外面を赤彩する。

高杯 K (第11図117) 脚部破片。内湾気味にハの字に開く脚台部で、端部には粘土帯を貼付して肥厚させる。円筒状の脚柱が付くものと推定される。内・外面を赤彩する。

高杯 L (第9図71) 脚部破片。円筒状の脚柱とハの字に開く脚台からなり、脚端が上方へ折り返され、端面がほぼ水平になる。脚台中位に4個の円孔を穿ち、外面を赤彩する。

高杯 M (第9図62・63) 脚部破片。脚端部が下方へ短く屈曲し、いわば受口状を呈するものである。63は内・外面を赤彩する。

高杯 N (第9図61) 脚部破片。途中で外反角度を変えて大きく開くもので、端部は丸くおさめる。全体的に厚手のぼってりとした造りで、内・外面を赤彩する。他器種の脚部の可能性もある。

器台 (第9図73、第10図105)

器台は2個体のみの出土で、全形を知り得る資料は無い。受部は外上方へ直線的にのびるロウト状で、円筒状の脚柱部が付く。脚柱下部には円孔を穿つ。受部外面はハケメの後ナテ調整、内面はナテ調整。脚柱部外面はヘラケズリの後ナテ調整、内面はヘラケズリがなされる。受部・脚部とともに内・外面を赤彩する。

小型土器 (第8図48)

コップ状を呈し、平底の底部が付く。手捏ね品で、内・外面を赤彩する。

その他 (第6図16)

器形及び調整から一時に壺に分類したものであるが、胴部の破断面は焼成時の熱を受けており、焼成前か焼成中に破損したと考えられる。一方、口縁部の破断面は熱を受けておらず、焼成終了後に破損した事は明らかである。以上から考えると、焼成前か途中に破損した壺の部分を、他の用途に転用したものと推定される。その形態からして、恐らく器台等に転用したものであろう。

土製品

ヘラ状土製品 (第12図 124) X 4 Y 9区の土器ダマリから出土した。一部破損しているが、長さ8.4cm、幅は推定4 cmである。焼成はたいへん良好で硬く、たたくと金属的な音がする。

背側 (図上方) は、端に面をもち中央部に突起が付く。腹側は、磨耗してはいるが端部を尖り気味におさめており、刃部を意識していることがうかがえる。また、基部 (図右側) はナテで丸くおさめる。

以上の形態から見て、この土製品は石包丁を模して作られたものと推定される。また、刃にあたる部分の磨耗が他の部分に比して著しいことから、実用の穀搗み具と考えられる。

石器

剣片 (第12図125) X 5 Y 9区の包含層から出土した。頁岩製で、長さ3.5cm、先端部幅3.6cm、基部幅2.0cmを測る。先端部には使用痕がある。

(森)

(3) 奈良～平安時代の遺物 (第13図 1～6・9)

地表面近くで、カク乱をうけていると思われる層から散発的に出土した。

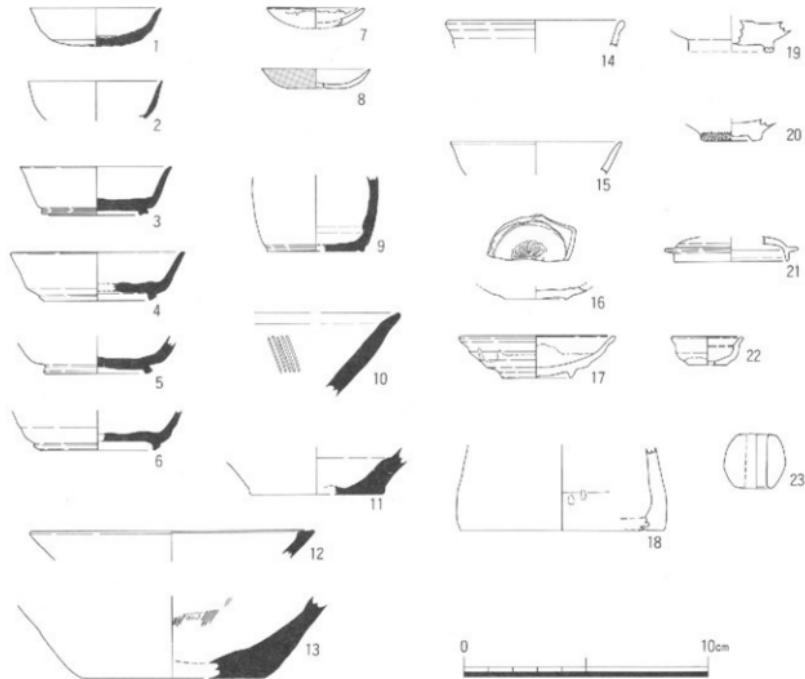
杯A (1・2)

1はほぼ完形。口径10.8cm、器高3.2cm。口縁端部がやや外反気味に尖るもので、底部はヘラ切りの後ナテ調整を施す。底部内面には強いロクロナデによる細い凹凸ができるおり、底部外面には板目痕を残す。底部と体部との境に明確な棱をもたず、全体に丸味を帯びたもので、比較的古い様相を示す。

2は口縁部破片。1と同様に全体に丸味をもたせたものであろう。口径は約11cm。体部はほぼ直線的にのび、口縁端部をうすく尖らせる。

杯B (3～6)

3は口径12.4cm、器高4.0cm。口縁部が直線的に外傾するもので、端部は内から外へ、やや尖り気味におさめている。底部はヘラ切り後丁寧なナテ調整を行っており、板目痕を残す。高台は床との接地面に細い溝がめぐり、外端部がややあがる。内面において底部と体部の境がはっきりとつけられるもので、底部内面に不定方向のナテが施される。新しい様相をもつ。



第13図 遺物実測図 包含層

4は口径14.0cm、器高4.0cm。体部がやや内湾気味に立ちあがり、中位で角度を変えて直線的に外傾する。口縁端部は丸くおさめる。底部内面には強いロクロナテによる凹があり、特に体部との境には細くはっきりと残る。底部はヘラ切り後ナテ調整で板目痕を残す。高台は外端部を体部にナテつけるように外傾させ、内端部を尖らせている。

5は還元不良軟質の製品で、全体に磨滅が激しい。底部はヘラ切り後ナテ調整で、高台外端部がやや外傾する。

6は4と似た形態を持つ、やや大ぶりなもの。

壺（9）

無耳の壺と思われる。底径8.0cm。底部は回転ヘラ切りで無調整。体部外面は回転ヘラ削りを行う。ただ、底部からの立ち上がり部分を底部と体部にそれぞれ1条のロクロナテを施し、特徴をもたらしている。内面はロクロナテで、特に体部の立ち上がり部分は強くナテで凹ませている。底部外面には焼台痕と思われる部分が残る。3と同様に、これらの遺物の中では新しい様相を持つもの。

（4）中世以降の遺物

青磁、白磁、瀬戸焼、珠洲焼などがあり、これらは奈良～平安時代の遺物と同様、カク乱をうけていると思われる層より出土した。中世の遺構・穴-01からは、珠洲焼、塗皿、曲物が出土した。

穴-01出土遺物（第14・15・16図）

珠洲焼（第14図）

人甕の破片と思われる。叩き目がやや粗く、珠洲III～IV期のものであろう。破片の断面の一部には接着用と思われる漆の付着が見られる。穴-01の底近く、曲物の下に敷かれる形で出土した。

漆皿（第15図）

珠洲焼・曲物などと共に出土したが、3・4はやや離れた位置で、6は曲物の中から、5は曲物・珠洲焼の下からいずれもふせた形で検出された。3から順次小さくなるが、どれも高台は低く、横木取りの挽き物で、底部からの立ち上がりを一部粗く削るものもある。高台と床の接地面のみは漆が付着していない。また、ロクロ爪痕は見られなかつた。

3は、口径12.0cm、器高1.7cm。外面は黒色漆、内面は赤色漆で仕上げている。内面赤色漆の下塗りは不明。底部外面に「半」のようなひっかけキズが残る。内面は底部から縁をもっていったん立ち上がり、後ながらに内湾する。この結果内面には段ができる。

4は、口径9.8cm、器高2.0cmの少し深めの皿、内外面共黒色漆で塗られ、内面には赤色漆で筆書きによる4本の草が描かれている。

5は口径9.0cm、器高1.5cm。8と同様、黒色漆で塗られ、内面には筆によって鳥・草が描かれている。外面には底部と体部の境から口縁部にかけて粗い削り痕が見られる。

6は、口径8.4cm、器高1.5cm。内外面黒色漆。外面において、底部及び体部との境に粗い削り痕を残す。

曲物（第16図）

曲物の側板が2種類重ねられ、底板はその中に浮いた状態で出土。穴-01の南東にかたよって検出された。

7・8は共に板を一重に回し桜皮で綴じ合わせたもの。

7は幅11.3cmで5ヶ所以上を綴じる。外面には綴じ皮の横に縦の線切きがされている。また綴じた部分には横にも刀物による線が残っている。綴じ皮の幅は4mm。

8は幅13.8cmで3ヶ所以上を綴じる。綴じ皮の幅は5mm。

いずれも径は不明であるが、9の底板が、いずれかに伴うものであると考えられ、また2つが積み重なっていたということから、19cm程度の径が与えられよう。

9は底板で、径は19.0cm、厚さ5mm。周辺には幅2mm程で法がとられ、一部に2条の刀物痕が見られるが、まな板に転用されたものではないと思われる。

包含層出土遺物（第13図）

珠洲焼（10～13）

いずれもすり鉢。9・12は15世紀以降、10・11は13～14世紀のものと思われる。

10は口縁部破片。端部がやや外傾し、稜を持って外側に折れるもの。5条のオロシメが残る。

11は底部で、中央が非常に薄いづくりになっている。

12は口縁部破片で、口径約23.4cm。端部に受け口状に面をとったもの。

13は底部。厚いづくりで、わずかにオロシメを残す。

土師質小皿（7・8）

いずれも非クロロ製品。

7は口径8.0cm。全体に丸味を帯びたもので、やや器壁が厚い。口縁端部にはタール痕が残る。16世紀。

8は口径9.0cm。底部中央がわずかにあげ底状になる可能性がある。外面赤彩。13～14世紀か。

青磁（14・19）

共に15～16世紀のもの。

14は青磁碗。玉縁状口縁部破片で、口径14.4cm。オリーブ色を呈す。

19は底部破片。薄い青緑色。

白磁（20）

底径5.0cm。外面は露胎で、外側の高台と体部の境目の部分には、斜めにキザミが入っている。12世紀。

瀬戸・美濃焼（15～17・22）

15は椀の口縁部破片で、黄色の釉に細かな貫入が入っている。口縁端部では磨滅のためか、一部釉がはげ落ちている。

16は菊皿の底部破片。緑色の釉がかかる。底部内外面は無釉で、内底面に印花文がある。底部外面はうすく削って低い高台をつくりだす。16世紀中頃。

17は皿で、灰釉がかかる。底部内外面は無釉。17世紀以降。

22は天目。口径6.0cm、器高2.3cm、底部は糸切り。体部中位で角度を変えて外傾する口縁をもつ。16と同時期。

京焼き（21）

蓋。体部外面にのみ釉がかかる。黄灰色の素地に黄色の釉を施す。

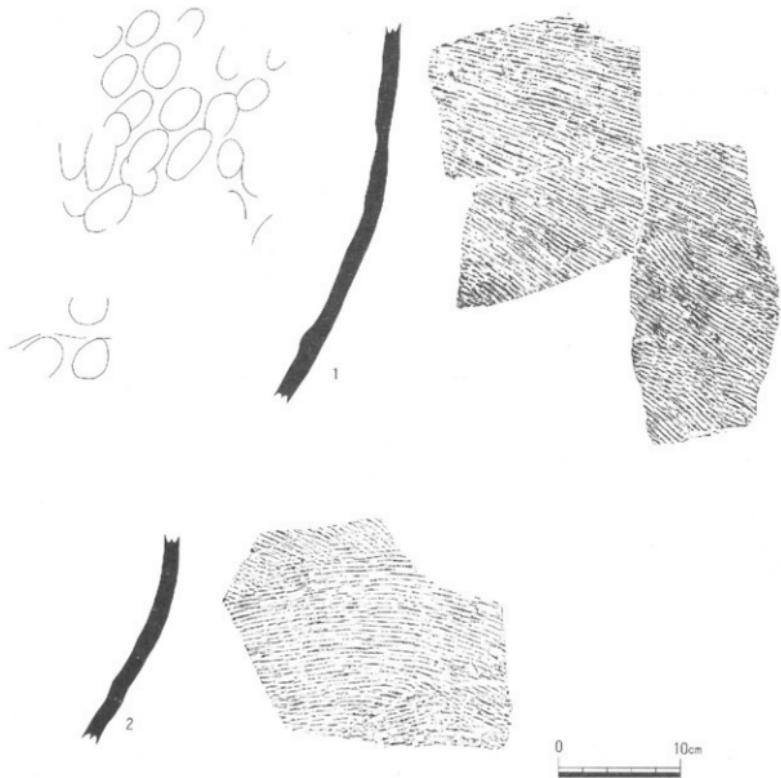
土鍋（23）

体部高4.5cm、体部径5.2cm。中央に径1.8cmの貫通孔を有する。胎土はきめ細かく、砂粒をほとんど含まない。灰褐色を呈す。あるいは、奈良～平安時代のものかもしれない。

不明土器（18）

筒状の胴部。底径17.0cm。胎土はきめ細かく、砂粒をあまり含まない。外面は丁寧なナデ調整、内面には指痕止痕を残す。底面部分は黒色で、他は灰褐色を呈す。底面とした部分は、あるいは粘土のつぎ目であるかもしれないが、器形を推測し得ない。

（山崎）

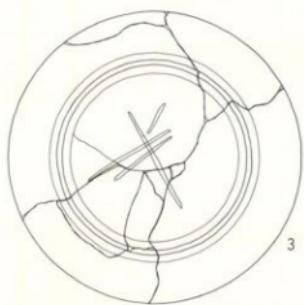


第14図 遺物実測図 穴-01

註

註1. 奈良時代以降の遺物については、宇野隆夫氏に御教示頂いた。

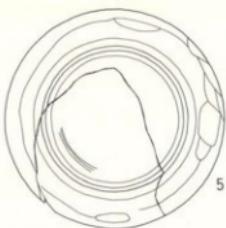
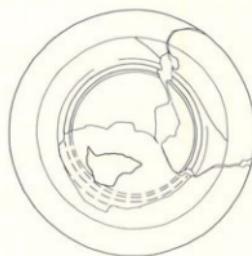
註2. 漆の色の表記については【四柳 1987】に従った。



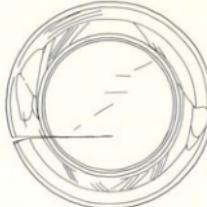
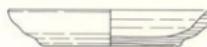
3



4



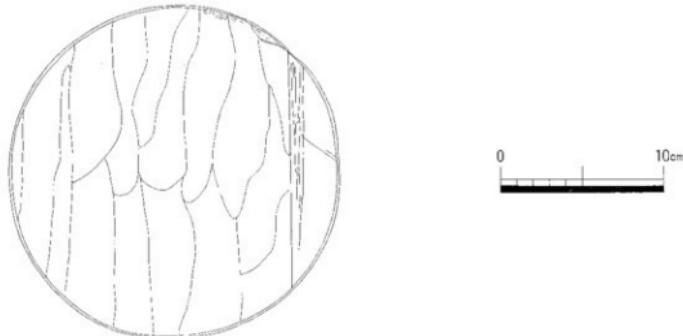
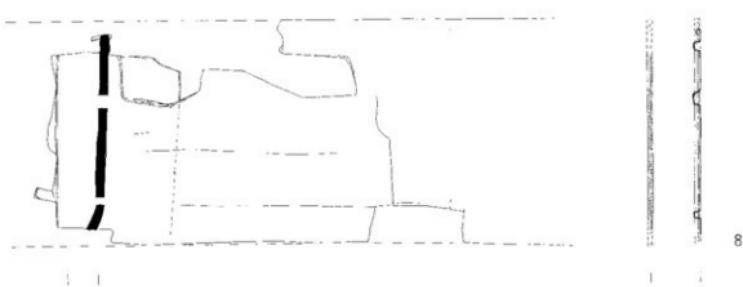
5



6



第15図 遺物実測図 穴-01



9

第16図 遺物実測図 穴-01

IV 調査成果

1 弥生時代の遺物について（第6～9、17図）

今回出土した弥生上器は、後期初頭から前葉にかけてのものが大部分を占める。これらは全て包含層から出土したものではあるが、帶状土器ダマリ出土の一群（第6～9図）に限っては高い一括性が見てとれる。ここでは、この上器ダマリ出土の一組について若干の考察をしてみたい。

器種には、壺・甕・鉢・瓶・高杯・器台があり、甕と高杯の出土量が多い。以下、主に第17図をもとに各器種について検討し、従来の編年の中での位置づけを行う。

壺

壺は8類14形態に分類したが、各形態とも量が少なく、1～2個体にすぎない。A・B₁・E₁類は広口壺、C₁～C₃・D₁・D₂類は長頸壺、F₁～F₃類は受口状口縁壺、Gは無頸壺、H₁・H₂が台付壺である。15～17の胴部破片は、15・17が広口壺、16は長頸壺に属するものと考えられる。

広口壺は、B₁が中期以来の形態で主流といえる。Aは薄手で外面全体をヘラミガキ調整するなど、畿内第V様式に類似が求められよう。E₁は珍しい器形であり、類例を発見できなかった。

長頸壺は、口縁部の外反するCと直線的なDに大別でき、C類は口縁部内・外面を赤彩する。Dはやや厚手で短かめのD₂が主流となる。D₁は底部が小さめにヘラケズリされており、やや新しい様相のものといえよう。

受口状口縁壺は、広口壺と長頸壺の中間的器形をもち、江上A遺跡〔久々 1982〕などに類例が見られる。

無頸壺は、外面上半がヘラミガキで下半にはハケメを残す。畿内第V様式との関連がうかがえる。

台付壺は、体部の張りがあり強くなく、江上A遺跡のものに類似する。

甕

甕は9類13形態に分類した。出土量は、A₁が全体の4割を占め、他は1～2点程度である。A₁～A₃・B₁・B₂・C・E₁類は受口状口縁甕、F・G₁・G₂・H₁・I・J類は「く」の字状口縁甕と大別できる。

受口状口縁甕は、倒卵形の胴部に平底が付くもので、口縁部外面に刺突列点文かキザミを施す。近江系のものと考えられる。A₁は口縁部に刺突列点文を施すもので、胴上部には柳描文と刺突列点文を施す。底部は平底で、22は底部側面をヘラケズリする。調整は内・外面ともハケメとナデによりなされるが、22・23は胴部内面をヘラケズリする。A₂は口縁部が無文のもので、内・外面を赤彩する。

「く」の字状口縁甕は、全体で甕の3割と少ない。Fは内・外面ともハケメ調整されており、やや長めの胴部に丸底が付くなど新しい様相が見られる。G₁は在地系の主流と考えられるもので、口縁端部は丸くおさめる。G₂はやや小型のもので、平底は小さめになる。内面はハケメの後ヘラケズリ調整し、内・外面を赤彩する。H₁は口縁に凹線を1条を施すもので、山陰地方の影響がうかがえる。Iは赤彩を施すもので、43は大型品である。Jは口縁を受口風に作るもので、受口状口縁甕との折衷品と考えられよう。

鉢

鉢は3類に分類した。出土量は各類1点とごく少ない。Aは直口の大型鉢である。口唇を連続して刻む例は中期に多く見られるもので、古い様相を残すものといえよう。Bは口縁部が短く「く」の字状に短く折れる大型鉢で、畿内の影響がうかがえる。CはBの小型品で、口縁端にやや凹んだ面をとり、内・外面を赤彩する。丁寧な作りである。

瓶

1点のみの出土である。砂粒をやや多めに含む胎土で厚めの器壁となっている。やや粗雑な作りで、表面に輪積み痕を残す。畿内に類例は見られない。

高杯

高杯は13類14形態に分類した。甕について出土量が多く、種類は最も多い。赤彩品の比率がきわめて高く、9割を超える。Aは杯口縁部が垂直に立った後に外反するもので、畿内第V様式初頭の器形の影響がうかがえる。Bは杯体部はロウト状だが口縁部が少し長くなっている、端部も押し広げて面をとるなど若干後出的である。Cはロウト状全体部に短かめの口縁部が付くもので、高杯の主流をなすものと考えられる。Dは口縁部がきわめて短かく、表面をヘラミガキ調整して薄手に作るなど、他に比べてかなり異質である。畿内方面からの搬入品の可能性が高い。Eは口縁部が長くのびて外反しており、新しい様相といえよう。Fは小型品で、直線的にのびる杯部の形態は、畿内第V様式に類似品が見られる〔井藤 1973b〕。Gは棒状有段脚をもち杯口縁部も長めである。Hは内湾気味の脚台部と桟状の杯体部をもち、山陰地方の影響を強くうけている。I₁はハの字形に開く脚台部で、最も一般的なものである。直径は10cm前後で赤彩が施される。I₂はI₁の大型品で、端部は面をとって肥厚させる。Jは脚端部に粘土帯を貼付して肥厚させるもので、江上A遺跡には類例が多く見られる。Lは脚端部を折り返すもので、やはり江上A遺跡に類例が見られる。Mは脚端部が内屈するもので、山陰系のものと考えられる。Nは小型品と思われるが、台付甕の脚部の可能性も高い。

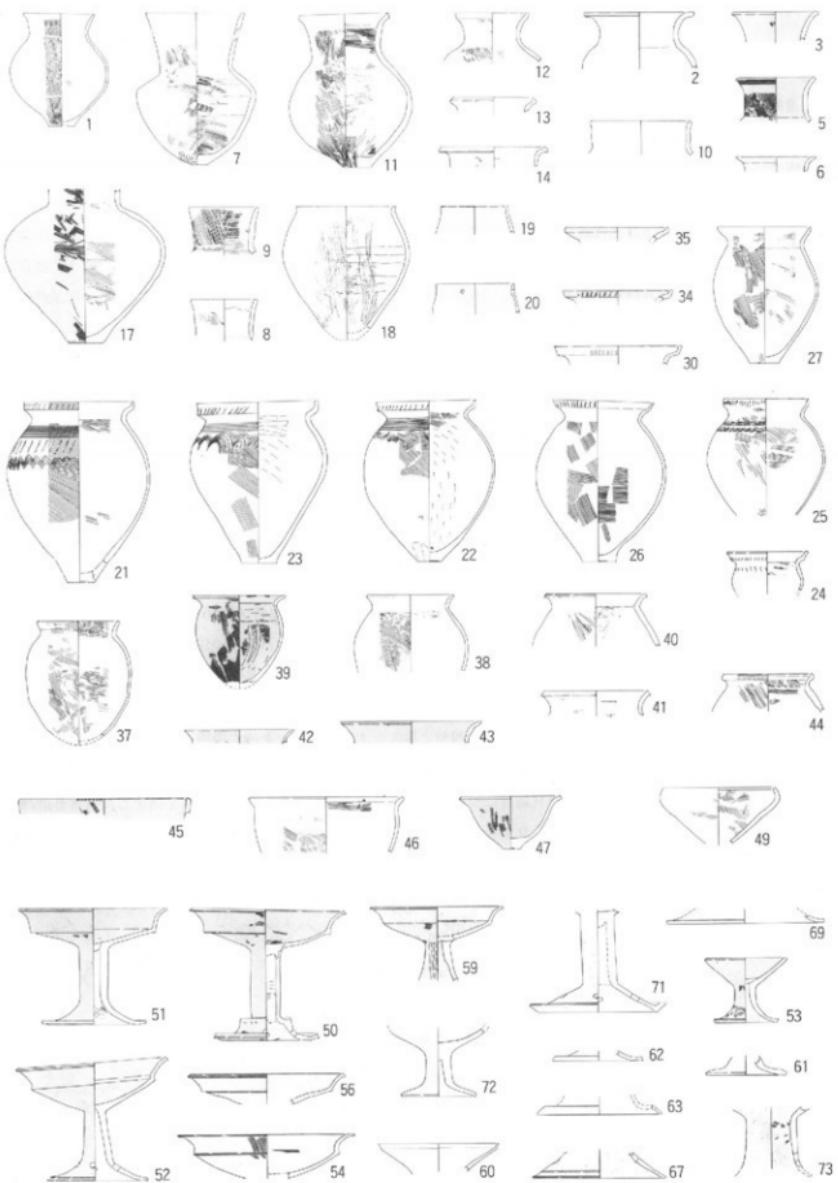
器台

脚部の破片のみであるが、受部の形態は第10図105のように直線的に開くものと考えられ、畿内第V様式の影響を受けたものと思われる。江上A遺跡に類例が見られる。

以上、各器種について見たが、その構成要素は中期的なものと後期的なものに分けられる。後者としては、長頸甕・台付甕の出現、受口状口縁甕の盛行、甕の内面ヘラケズリ技法の出現、高杯の比率の増加、器台の出現などがあげられ、前者としては、櫛搔文様の存在、甕の内面ハケメ調整技法の高い残存率（6～7割程度）、直口で口唇部を連続して刻む鉢の存在、直線的にのびる杯部をもつ高杯の存在などがあげられる。ここから、主軸となる要素は後期のものでありながら、まだ中期的な要素も残していると言ふことができよう。

すなわち、当土器群の時期は、おおよそ弥生時代後期初頭から前葉にかけてと考えられる。県内における弥生時代後期を通しての編年は久々氏によってなされているが〔久々 1984〕、その中ではⅠ期に位置づけられよう。

（森）



第17図 土器ダマリ出土土器群 (S = 1/6)

2 中世の遺構について

上述跡は今回で3回目の発掘調査を数える。このうち、第1次調査において今回検出された遺構と深く関連する事柄が発見されている。

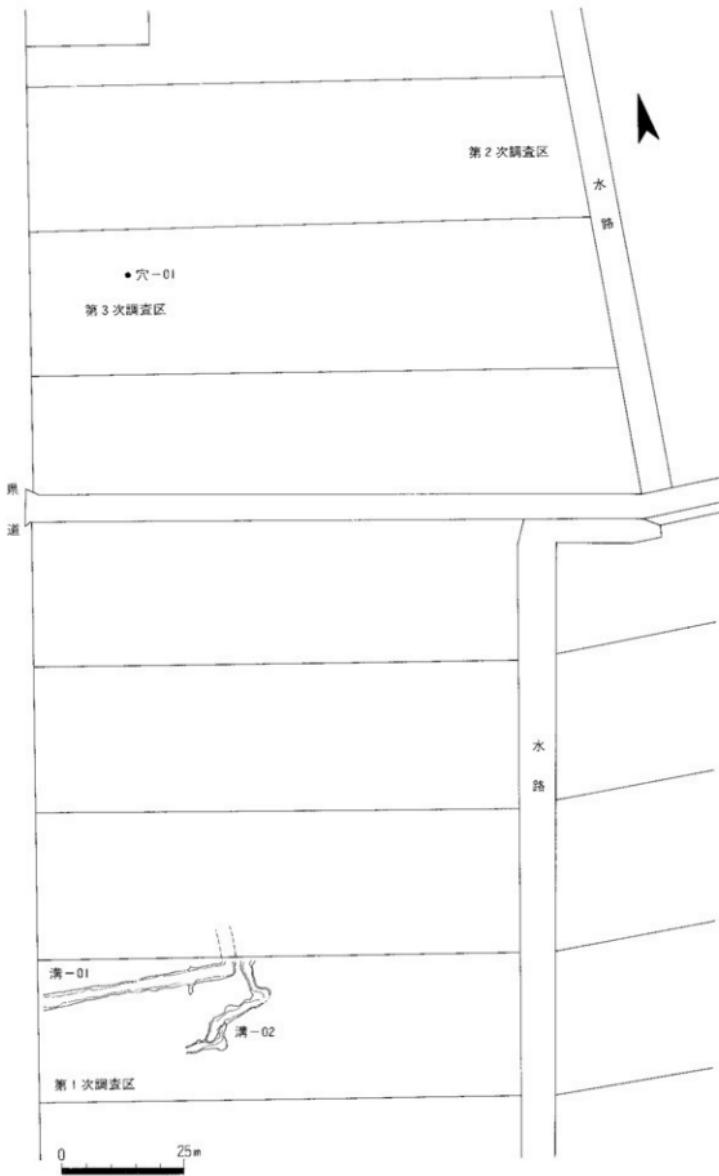
遺構について、第1次発掘調査では大小2条の溝が検出され、そのうちの大溝（溝-01）からは大量の木製品と若干の土師質小皿が出土している。この溝-01は上市町江上B遺跡にみられるような建物を区画するためのものと考えられ、北に隣接する水田下に建物跡の存在の可能性が指摘されている（第20図）。そして今回検出された穴-01は径58cmのほぼ正円で2種の曲物の下に珠洲壺破片が敷かれていた。中心よりかたよって曲物等が存在すること、漆皿が2枚は曲物の中から、2枚は外からそれぞれうつ伏せの状態で出土するなど疑問は残る。しかし底面は今回最終検出面に接し、かなりの湧水が見られたことから考え、曲物井戸としてつくられたものが、土圧により、このような状態になったものとするのが自然であろう。底は標高およそ21.50mであるが、層位のところで述べたように上位1mはカク乱をうけているため、はっきりとした上面の輪郭をつかむことができなかつた。このことから実際の深さを確定することはできないが、第1次調査の溝-01は標高およそ22.80mであり、ゆるやかに下ってくることから考えて、約1m程の深さであったろうと考える。遺構の年代としては、溝-01は土師質小皿から13世紀前半（珠洲Ⅱ期）、穴-01は珠洲焼・漆皿から珠洲Ⅲ～Ⅳ期が与えられる。ここに見られる若干の年代差については、想定される建物群の存続期間の長さとしてとらえることができよう。溝-01からも漆壺・漆皿が出土しており、穴-01出土のものが高台の形・高さなどによってやや後出のものと考えるが、年代的に大きな差をもつものではない〔久々 1986〕。

井戸の形態について周辺の遺跡に目をむけてみると、中心期を珠洲Ⅰ期にのつ神田遺跡〔橋本 1981〕では、木製の井戸枠をもつ井戸の底面から珠洲焼が出土し、珠洲Ⅱ期を中心とする若宮B遺跡〔狩野 1981〕では、素掘りの井戸から漆皿・漆塗片口鉢が出土した。この2遺跡は、その建物の規模などから村落領主の住居と考えられている〔宮田 1984〕。井戸の径はいずれも1m以上あり、深さも1m程である。先述の江上B遺跡では、第1次調査で出土した板枠状木製品と似た形態のものが出土し、同様の祭祀が行われた可能性が指摘されているが〔北川 1987〕、ここでは建物の屋内に水をひき入れ、貯めておく施設として四角に組んだ木枠の中に底を残す曲物（径34cm弱）が利用されている。年代としては、建物の新旧関係からその存続年代の後半が与えられよう^{註1}。若干の年代差があるにしろ、住居から考えられる階層差は、井戸あるいは水利施設については認めることができない。同じ漆器を出土した若宮B遺跡の井戸と今回検出の穴-01では後者の方がより手を加えられているように思われる。このことを単に年代による変化と考えるか、あるいは当時の立地として不安定な地盤に居を構えさせられたためと考えるか〔押川 1990〕、はっきりと明示することはできない。^{註2}

（山岸）



第16図 周辺の遺跡（上市町 1981）より加筆して転載



第19図 遺跡中世遺構位置区

No.	器種	出七位置	法量(cm)	口頭部(杯部)	体部(脚部)	砂粒	色調	焼成	残存度	備考	
1	壺	x4y9 青灰	口径11.7cm	外: ハラミガキのちナデ 内: ヨコナデ	外: ハラミガキ 内: ハケのちナテ	少	淡茶褐色	良好	ほぼ完全		
2	壺	x4y8 青灰	口径18.0cm	外: ナデ 内: ナデ	外: ナデ 内: ナデ	中	淡赤褐色	良好	約1/6	外壁及ヒメ内面 赤色顔料付	
3	壺	x4y9 和青灰	口径13.0cm	外: ハケのちナデ 内: ヨコナデ	外: ハケのちナデ 内: ヨコナデ	中	淡茶褐色	良好	約1/6	内外面赤色顔料付	
4	壺	x4y9 青灰	口径13.0cm	外: ハケのちヨコナデ 内: ヨコナデ	外: ハケのちヨコナデ 内: ヨコナデ	中	淡灰褐色	良好	約1/4	内外面赤色顔料半 付	
5	壺	x4y9 青灰	口径12.0cm	外: ハケのちナデ 内: ナデ	外: ハケのちナデ 内: ナデ	多	灰褐色	良好	約1/2	内外面赤色顔料半 付	
6	壺	x4y9 青灰	口径13.0cm	外: ナデ 内: ナデ	外: ナデ 内: ナデ	中	外: 淡灰色 内: 黄灰色	良好	約1/6	内外面赤色顔料半 付	
7	壺	x5y8 青灰	口径15.0cm	外: ハケ 内: ハケのちナデ、 ヘラミガキ	外: ハケ 内: ハケ	中	茶褐色	良好	ほぼ完全		
8	壺	x4y9 青灰	口径11.0cm	外: ハケ、ヨコナデ 内: ヨコナデ	外: ハケ 内: ヨコナデ	少	淡褐色	良好	約5/12	内外面久付青	
9	壺	x4y9 青灰	口径10.8cm	外: クラハル 内: ヨコナデ	外: クラハル 内: ヨコナデ	少	灰褐色	良好	約2/3		
10	壺	x4y9 青灰	口径16.5cm	外: ナデ? 内: ナデ?	外: ナデ? 内: ナデ?	多	灰褐色	良好	約1/12	内外面赤色顔料半 付	
11	壺	x4y9 青灰	口径14.0cm	外: ハケのちナデ 内: ハケのちナデ	外: ハケ 内: ハケ	中	淡褐色	良好	ほぼ完全		
12	壺	x4y9 青灰	口径12.0cm	外: ハケのちヨコナデ 内: ヨコナデ	外: ハケのちヨコナデ 内: ヨコナデ	多	灰褐色	良好	山形無 ほぼ完全		
13	壺	x4y9 青灰	口径13.0cm	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	少	外: 茶褐色 内: 黑褐色	良好	約1/8		
14	壺	x4y9 青灰	口径17.0cm	外: ハケのちナデ 内: ヨコナデ 難題: ヨコナデ	外: ハケのちナデ 内: ヨコナデ	中	淡茶褐色	良好	約1/12	外面スス付青	
15	壺	x4y9 青灰	—	外: ナデ? 内: ヨコハケのちヨコナデ	外: ナデ? 内: ヨコハケのちヨコナデ	少	外: 黄褐色 内: 黑褐色	良好	約1/8	内外面赤色顔料半 付	
16	壺	x4y9 青灰	—	外: ハケ 内: ナデ	外: ハケ 内: ナデ	多	黄褐色	良好	ほぼ完全	内外面赤色顔料半 付 細刷	
17	壺	x4y9 青灰	—	外: ハケ、ナデ 内: ナナハケのちナデ	外: ハケ、ナデ 内: ナナハケのちナデ	中	外: 淡褐色 内: 淡青褐色	良好	ほぼ完全	内外面赤色顔料半 付	
18	壺	x4y9 青灰	口径16.0cm	外: ナデ 内: ナデ	外: ハケのちラミガキ 内: ハケのちナデ	中	淡褐色	良好	約1/4		
19	右付蓋	x4y9 青灰	口径11.0cm	外: ナデ	外: ナデ	中	淡茶褐色	良好	約1/12	内外面赤色顔料半 付	
20	右付蓋	x4y9 青灰	口径12.0cm	外: ナデ 内: ナデ	外: ナデ 内: ナデ	中	淡茶褐色	良好	約1/12	内外面赤色顔料半 付	
21	壺	x4y9 青灰	口径17.8cm	外: クリによる創突角点文 ナメハケ	外: クリによる創突角点文 ナメハケ	中	外: ナナハケのち筋頭文 創突角点文 内: ナナ	少	淡茶褐色	良好	ほぼ完全 透孔1個
22	壺	x4y9 青灰	口径16.3cm	外: クリによる創突角点文 ナメハケ	外: クリによる創突角点文 ナメハケ	中	外: ナナハケのち筋頭文 創突角点文 内: ナナ	多	淡茶褐色	良好	約1/12
23	壺	x4y9 青灰	口径19.9cm	外: クリによる創突角点文 内: ヘラミガキ、ヨコナデ	外: ヘラミガキ、ヨコナデ	中	茶褐色	良好	ほぼ完全	外面スス付青	
24	壺	x4y9 青灰	口径15.6cm	外: クリによる創突角点文 内: ヨコナデ	外: クリによる創突角点文 内: ヨコナデ	多	淡茶褐色	良好	約1/4	内外面赤色顔料半 付 外面スス付青	
25	壺	x4y9 青灰	口径13.6cm	外: ナナのちヘラキザイ 内: ヨコナデ	外: ナナのちヘラキザイ 内: ヨコナデ	中	淡茶褐色	良好	ほぼ完全	外面スス付青	
26	壺	x4y9 青灰	口径16.7cm	外: クリによる創突角点文 内: ヨコナデ	外: ハケ 内: ハケのちナデ	少	淡茶褐色	良好	ほぼ完全	外面スス付青	
27	壺	x4y9 青灰	口径15.0cm	外: ナデ 内: ナデ	外: ハケ 内: ハケ	少	茶褐色	良好	ほぼ完全	外面スス付青	
28	壺	x4y9 青灰	口径22.5cm	外: クリによる創突角点文 内: ヨコナデ	外: ナナのちヘラキザイ 内: ヨコナデ	中	外: 淡黄褐色 内: 黑褐色	良好	約0.3/12	外面スス付青	
29	壺	x4y9 青灰	口径21.0cm	外: ヘラキザイ	外: ナナのちヘラキザイ 内: ヨコナデ	中	外: 淡灰褐色 内: 黑褐色	良好	約1/12		
30	壺	x4y9 青灰	口径21.0cm	外: ヘラキザイ	外: ナナのちヘラキザイ 内: ヨコナデ	中	外: 淡茶褐色 内: 淡茶褐色	良好	約1.8/12	外面スス付青	
31	壺	x4y9 青灰	口径20.0cm	外: クリによる創突角点文 内: ヨコナデ	内: ハケ	中	淡茶褐色	良好	約1/12		

No.	器種	出土位置	法量(cm)	口部(杯部)	体部(脚部)	砂粒	色調	焼成	残存度	備考
32	甕	x5y8 青灰	口径19.0cm	外:クシによる削尖利点文 内:ヨコナデ	外:ハケ 内:ハケのちナデ	多	淡灰褐色	やや不良	約1/8	外面スス付着
33	甕	x5y9 青灰	口径18.0cm	外:ハケのちクシによる削尖利点文 内:ヨコナデ	外:ハケ? 内:ハケのちナデ	中	茶褐色	良好	約1.5/12	
34	甕	x4y9 青灰	口径18.0cm	外:クシによる削尖利点文 内:ヨコナデ		中	淡灰褐色	良好	ほぼ完全	内外赤色顔料付
35	甕	x4y8 青灰	口径17.0cm	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		中	淡灰褐色	良好	約1/12	内外赤色顔料付
36	甕	x4y9 青灰	口径18.0cm	外:ナダのちヘラキサミ 内:ヨコナデ	外上:ヘラキサミ 内:ナダのちナデ	多	淡灰褐色	良好	約2/3	外面スス付着
37	甕	x4y8 青灰 x4y8 青灰	口径18.0cm	外:ハケ 内:ハケ	外:ハケ 内:ハケのちナデ	中	淡灰褐色	良好	約3/4	外面スス付着
38	甕	x5y8 青灰	口径14.0cm	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	外:ハケ 内:ハケのちナデ	中	淡灰褐色	良好	約2/3	外面スス付着
39	甕	x4y9 青灰	口径15.0cm	外:ナダケのちヨコナデ 内:ヨコハケのちヨコナデ	外:ハケ 内上:ヨコハケアリ 内中:ヨコハケのちナデ 内下:ヘラヘラケツリのちナデ	中	淡灰褐色	良好	約2/4	内外赤色顔料付
40	甕	x4y9 青灰	口径17.0cm	外:ハケのちナデ 内:ヨコナデ	外:ハケ 内上:ハケのちヘラケツリ 内中:ハコヘラケツリ	少	淡褐色	良好	約2/4	外面スス付着
41	甕	x4y9 青灰	口径17.0cm	外:ハケのちナデ 内:ナデ	内:ハケのちナデ	多	灰褐色	良好	約3/12	
42	甕	x4y9 青灰	口径16.0cm	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	内:ナデ	中	灰褐色	良好	約1/6	
43	甕	x5y8 青灰	口径22.0cm	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	外:ハケのちナデ	中	外:茶褐色 内:淡灰褐色	良好	約9.8/12	内外赤色顔料付
44	甕	x4y9 青灰	口径14.0cm	外:ハケ 内:ヨコナデ	外:ハケ 内:ハケのちナデ	中	灰褐色	良好	約1/4	
45	甕	x4y9 青灰	口径27.0cm	外:ハケのちナデ 内:ヨコナデ 腹面:ヘラキサミ	外:ハケのちナデ 内:ナデ	中	乳褐色	良好	約7.7/12	内外赤色顔料付 外側?
46	甕	x4y9 青灰	口径25.0cm	外:ヨコナデ 内:ハケのちナデ	外:ハケ 内:ナデ	多	淡灰褐色	良好	約1/6	
47	甕	x4y9 青灰	口径16.0cm	外:ナデ 内:ヨコナデ	外:ハケ 内:ナデ? 外ド:ヘラケツリ 内:ナデ?	多	灰褐色	良好	ほぼ完全	内外赤色顔料付
48	小型土器	x4y9 青灰	口径 5.7cm			少	茶褐色	良好	ほぼ完全	内外赤色顔料付 手づくね
49	甕	x5y8 青灰	口径18.0cm	外:ハケのちナデ 内:ハケのちナデ	外:ハケのちナデ 内:ハケのちナデ	中	淡灰褐色	良好	約1/6	内外赤色顔料付
50	高杯	x4y9 青灰	口径25.5cm	外:ハケのちヘラミガキ ナデ	外:ハケのちヘラミガキ ヘラミガキのちナデ 内:ハケのちヘラミガキ ヘラミガキのちナデ	少	淡茶褐色	良好	ほぼ完全	内外赤色顔料付 透孔 4 個
51	高杯	x4y9 青灰	口径23.6cm	外:ハケのちナデ 内:ヘラミガキ?ナデ	外:ナデ 内:ハケのちナデ	中	灰褐色	良好	ほぼ完全	内外赤色顔料付
52	高杯	x4y9 青灰	口径24.0cm	外:ハケのちナデ 内:ナデ	外:ハケのちナデ 内:ナデ	少	淡灰褐色	良好	約12/12	内外赤色顔料付 透孔 4 個
53	高杯	x4y9 青灰	口径23.5cm	外:ハケ 内:ナデ	外:ハケのちナデ 内:ナデ	多	灰褐色	良好	約12/12	内外赤色顔料付
54	高杯	x4y9 青灰	口径29.0cm	外:ハケのちナデ	外:ハケのちナデ 内:ナデ	少	赤褐色	良好	約5/12	内外赤色顔料付
55	高杯	x5y8 青灰	口径26.0cm	外:ナデ	外:ナデ 内:ヘラミガキ?ナデ	中	淡茶褐色	良好	約1/4	内外赤色顔料付
56	高杯	x4y9 青灰	口径25.0cm	外:ヘラミガキ?ナデ 内:ヘラミガキ?ナデ	外:ナデ 内:ナデ	少	灰褐色	良好	約3/8	内外赤色顔料付
57	高杯	x4y9 青灰	口径22.4cm	外:ハケのちナデ 内:ハケのちヘラミガキ のちナデ	外:ヘラミガキ 内:ヘラケツリ	多	茶褐色	良好	ほぼ完全	内外赤色顔料付
58	高杯	x4y9 青灰	口径21.0cm	外:ハケのちナデ 内:ヘラミガキ?ナデ	外:ヘラミガキ 内:ヘラケツリ、ハケのちナデ	中	淡茶褐色	良好	約1/4	内外赤色顔料付
59	高杯	x4y9 青灰	口径21.0cm	外:ハケのちナデ 内:ヘラミガキ?ナデ	外:ヘラミガキ 内:ヘラケツリ、ハケのちナデ	中	赤褐色	良好	約1/4	桜井内外赤色顔料付

No.	器種	出土位置	法量(cm)	口頭部(杯部)	体部(脚部)	砂粒	色調	焼成	残存度	備考
60	高杯	x4y9 青灰	口径19.6cm	外:ハケのちナデ 内:ヘラミガキ、ナデ		中	茶褐色	良好	約1/4	
61	脚部	x4y9 青灰	脚端径12.6cm	外:ハケのちナデ 内:ナデ		少	淡茶褐色	良好	約1/4	内外面赤色顔料塗付
62	脚部	x4y9 青灰	脚端径15.0cm			少	淡茶褐色	良好	約1/4	
63	脚部	x5y8 青灰	脚端径20.0cm	外:ナデ 内:ナデ		中	淡茶褐色	良好	約1/12	内外面赤色顔料塗付
64	脚部	x4y9 青灰	脚端径12.0cm		外:ハケのちナデ 内:ナデ	中	淡茶褐色	良好	約1/6	内外面赤色顔料塗付
65	脚部	x4y9 青灰	脚端径11.0cm		外:ナデ 内:ナデ	中	灰褐色	やや不良	約1/8	
66	脚部	x4y9 青灰	脚端径9.0cm		外:ナデ 内:ナデ	中	乳白色	良好	約1/4	内外面赤色顔料塗付
67	脚部	x4y8 青灰	脚端径22.0cm	外:ハケのちナデ 内:ハケのちナデ		少	灰褐色	良好	約1/8	内外面赤色顔料塗付
68	脚部	x4y9 青灰	脚端径24.0cm	外:ハケのちナデ 内:ハケのちナデ		少	淡茶褐色	良好	約1/10	
69	脚部	x4y8 青灰	脚端径25.0cm		外:ナデ 内:ナデ	中	灰褐色	良好	約1/12	
70	脚部	x4y8 青灰 x5y7 青灰	脚端径19.0cm	外:ナデ 内:ナデ		中	灰褐色	良好	約1/4	外表面赤色顔料塗付 透孔3個
71	脚部	x4y8 青灰 x4y9 青灰	脚端径22.5cm	外:ハケのちナデ 内:ナデ		中	淡茶褐色	良好	約5/12	外表面赤色顔料塗付 透孔4個
72	高杯	x4y9 青灰	脚端径11.0cm		中	淡茶褐色	やや不良	約1/3	内外面赤色顔料塗付	
73	高杯	x4y9 青灰	脚端径11.0cm	内上:ハケのちナデ 内中:ヘラケズリのちナデ		中	乳白色	良好	約1/4	内外面赤色顔料塗付 透孔1個
74	壺	x5y6 青灰	口径11.0cm	外:ハケのちナデ 内:ハケのちナデ		少	灰褐色	良好	約3/12	外表面スッカラ
75	壺	x5y6 青灰	口径14.0cm	外:ナデ 内:ナデ		少	外:淡茶褐色 内:淡茶褐色	やや不良	約1/12	
76	壺	x5y7 青灰	口径13.0cm	外:ナデ 内:ナデ		多	茶褐色	良好	約2/12	内外面赤色顔料塗付
77	壺	x6y7 青灰	口径15.0cm	外:ナデ 内:ナデ		中	淡茶褐色	良好	約1/12	内外面赤色顔料塗付
78	壺	x5y6 青灰	口径15.0cm	外:ヨコナデ、ヘラキザミ 内:ヨコナデ		中	淡茶褐色 内:淡茶褐色	良好	約1/12	
79	壺	x5y9 青灰	口径13.0cm			中	外:茶褐色+ 淡黄褐色 内:淡黄褐色	良好	約1/8	外表面スッカラ
80	壺	x5y6 青灰	口径14.0cm	外:ナデ 内:ナデ	外:ハケのちナデ 内:ハケのちナデ	中	淡茶褐色	良好	約1/12	内外面赤色顔料塗付
81	壺	x5y7 青灰	口径18.0cm	外:ナデ 内:細かいハケのちナデ	外:ハケのちラン状具脚突	少	淡茶褐色	良好	約1/8	白隠外面にスッカラ
82	底盤	x5y7 青灰	底径6.0cm	外:ナデ	外:ハケ	中	外:黒褐色 内:黒褐色	良好	約1/4	
83	底盤	x5y7 青灰	底径6.4cm	外:ナデ	外:ハケのちナデ 内:ハケのちナデ	中	外:茶褐色 内:茶褐色	良好	約1/2	
84	底盤	x5y7 青灰	底径4.4cm	内:ナデ	外:ナデ	多	外:茶褐色 内:黒褐色~黒 灰色	良好	約2/3	外表面赤色顔料塗付
85	底盤	x5y7 青灰	底径4.4cm	外:ナデ	外:ナデ	中	外:淡茶褐色 内:茶褐色	良好	約1/2	外表面赤色顔料塗付
86	杯部	x5y6 青灰	口径30.0cm	外:ヘラミガキ、ナデ 内:ヘラミガキ、ナデ		中	赤褐色	やや不良	約1/12	内外面赤色顔料塗付
87	杯部	x4y9 青灰	口径24.0cm		外:ナデ	少	外:赤褐色 一部茶褐色 内:淡茶褐色	良好	約1/3	内外面赤色顔料塗付
88	杯部	x5y6 青灰	口径25.0cm		外:ナデ	中	淡茶褐色	良好	約1/12	内外面赤色顔料塗付
89	杯部	x5y7 青灰	口径27.0cm	外:ヘラミガキのちナデ 内:ヘラミガキのちナデ		少	淡茶褐色	良好	約1/12	
90	杯部	x5y6 青灰	口径29.0cm	外:ヨコナデ 内:ハケのちナデ		中	淡茶褐色	良好	約1/8	内外面赤色顔料塗付
91	脚部	x4y7 青灰	脚端径16.0cm		外:ナデ	中	灰褐色	良好	約1/12	
92	脚部	x5y6 青灰		外:ナデ 内:ナデ、ヨコヘラケズリ のちナデ	外:ナデ 内:ナデ	多	淡茶褐色	良好	約4/5	内外面赤色顔料塗付 透孔4個
93	脚部	x4y6 青灰		外:ナデ 内:ナデ、ヨコヘラケズリ のちナデ	外:ナデ 内:ナデ	中	淡茶褐色	良好	約1/2	外表面赤色顔料塗付

No.	器種	出土位置	法量(cm)	口頸部(杯部)	体部(脚部)	砂粒	色調	焼成	残存度	備考
94	脚部	x5y10 青灰			外:ハケのちナデ 内:ナデ、ヨコヘラケズリのちナデ	少	淡黄褐色	良好	12.2完全	外面部赤色顔料塗付 内面部赤色顔料塗付
95	脚部	x5y10 青灰			外:タテヘラミガキのちナデ 内:タテヘラミガキのちココナデ	少	淡灰褐色	良好	約1/2	内外面部赤色顔料塗付
96	袋	x4y3 稲青灰	口径18.0cm	外:ナデ、クシ状具による 刺突 内:ヨコナデ		中	乳白色	良好	約0.5/12	
97	袋	x5y2 稲青灰	口径17.0cm	外:ヨコナデ		中	淡灰褐色	良好	約1/8	
98	袋	x6y6 稲青灰	口径14.0cm	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		少	乳褐色	良好	約1/8	外面部赤色顔料塗付
99	底部	x5y8 稲青灰	底径 3.0cm		外:ハケのちナデ 内:ハケ	少	外:黑色~ 基褐色 内:乳褐色	良好	12.2完全	
100	底部	x4y9 稲青灰	底径 5.4cm			少	赤褐色	良好	12.2完全	
101	底部	x4y7 稲青灰	底径 3.0cm		内:ナデ	中	外:淡灰褐色 内:黑色~ 基褐色	良好	12.2完全	
102	杯部	x5y8 稲青灰	口径26.0cm			中	外:基褐色 内:淡灰褐色	今や不良	約1/12	外面部赤色顔料塗付
103	杯部	x5y9 黄灰	口径14.8cm	外:ナデ 内:ナデ		中	灰褐色	良好	約1/8	外面部赤色顔料塗付
104	高柄	x5y8 稲青灰				中	外:淡灰褐色 内:基褐色~ 黑色	良好	12.2完全	外面部赤色顔料塗付
105	器台	x5y2 稲青灰	口径17.0cm	外:ハケのちナデ 内:ヨコナデ		中	稻褐色	やや不良	約1/3	外面部赤色顔料塗付
106	器台	x5y12 青灰	口径21.0cm			少	赤褐色	良好	約1/8	
107	器台	x4y9 黄灰	口径13.0cm	外:ハケのちナデ 内:ヨコナデ		中	淡灰褐色	やや不良	約1/8	外面部赤色顔料塗付
108	器台	五輪	口径16.0cm	外:ナデ 内:ナデ		中	外:淡灰褐色 内:乳褐色	良好	約1/12	外面部赤色顔料塗付
109	器台	x5y6 黑輪	口径20.0cm	外:ナデ、クシによる 刺突剥落文 内:ハケのちナデ		中	外:稻褐色 内:乳褐色	良好	約1/12	外面部赤色顔料塗付
110	器台	x5y6 黑輪	口径17.0cm	外:ナデ、クシによる 刺突剥落文 内:ヨコナデ		中	外:乳褐色 内:乳褐色	良好	約1/12	
111	器台	x5y6 三輪	口径18.0cm	外:沈継5条 内:ヨコナデ		中	乳白色	良好	約1/12	外面部赤色顔料塗付
112	器台	x4y9 黑輪	口径12.0cm	外:ナデ 内:ヨコナデ		多	乳白色	良好	約0.8/12	外面部赤色顔料塗付
113	器台	x6y7 黑輪	口径12.0cm			中	淡灰褐色	良好	約1/8	外面部赤色顔料塗付
114	器台	x5y10 三輪	口径16.0cm	外:ハケ? 内:ヨコハケのちナデ?	外:ハケ? 内:ハケのちナデ?	多	外:淡褐色 内:乳褐色	良好	約1/4	
115	杯部	x4y9 三輪		外:ナデ 内:ナデ		中	外:淡灰褐色 内:淡赤褐色	やや不良	約1/3	外面部赤色顔料塗付
116	杯部	x5y9 黑輪	口径30.0cm	内:ナデ		中	外:淡灰褐色 内:淡褐色	良好	約0.5/12	
117	脚部	x5y6 三輪	脚端径13.0cm		外:ヘラミガキ、ナデ 内:ハケのちナデ	中	淡灰褐色	やや不良	約1/8	外面部赤色顔料塗付 透孔有
118	脚部	黑輪	脚端径20.0cm		内:ナデ	少	赤褐色	やや不良	約1/8	外面部赤色顔料塗付
119	脚部	x4y9 黑輪	脚端径17.0cm		内:ナデ	中	灰褐色	良好	約1/6	外面部赤色顔料塗付
120	壺	表灰	口径15.0cm	外:ナデのちヘラミガキ 内:ヨコナデ		少	赤褐色	良好	約1/4	外面部赤色顔料塗付
121	脚部	表灰	脚端径19.0cm			中	淡黄灰色	良好	約1/6	外面部赤色顔料塗付
122	脚部	x4y9 表灰	脚端径20.0cm		外:ナデ 内:ナデ	中	淡赤褐色	良好	約1/12	外面部赤色顔料塗付
123	脚部	x4y6 口上	脚端径28.0cm			中	外:黑色~ 基褐色 内:稻褐色	やや不良	約1/12	

註

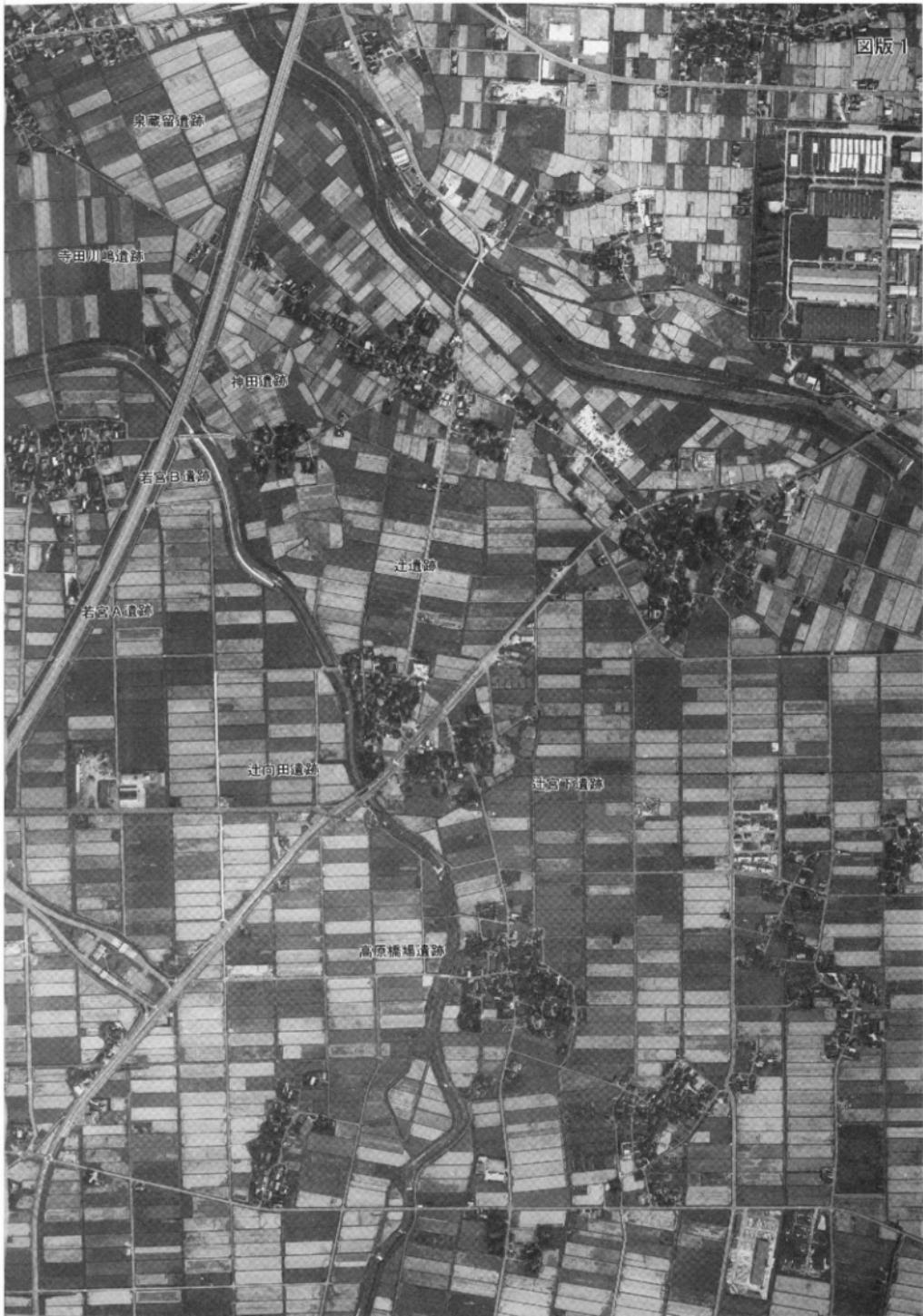
註1【宮田 1981】において、本査施設はSD122に附属するとされ、SD122は住居の変遷の中では最も新しいとされている。そしてこの遺跡が珠洲II～V期までのものであり、中心は珠洲III・IV期であるとされている。

【宮田 1984】

註2 これらの他に、中小泉遺跡【狩野 1981】では、径4m深さ約4mの巨大な井戸が検出され、珠洲I期のものとされている。

参考文献

- 〔イ〕井藤曉子 1973a 「近畿 IV 第III・第IV様式土器」『弥生土器I』ニューサイエンス社
井藤曉子 1973b 「近畿 V 第V様式土器」『弥生土器I』ニューサイエンス社
井藤曉子 1986 「4-2 櫛描紋、A. 畿内の櫛描紋」『弥生文化の研究』3 雄山閣
井藤曉子 1987 「4-1 畿内の櫛描文土器」『弥生文化の研究』4 雄山閣
- 〔ウ〕上野 章・押川恵子 1990 「VIまとめ」『布日沢北遺跡発掘調査概要』富山県大門町教育委員会
- 〔オ〕押川恵子 1990 「Vまとめ」『井口城跡発掘調査概要』富山県井口村教育委員会
- 〔カ〕狩野 誠 1981 「VII若宮B遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—立山町造構編—』富山県教育委員会
狩野 誠 1982 「IV中小泉遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編—』上市町教育委員会
上市町教育委員会 1981 『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町造構編』
- 〔キ〕岸本雅敏 1982 「V飯坂遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編—』上市町教育委員会
北川美佐子 1987 「IV調査成果 1-(2) 中世の木製祭具について」『辻・浦田遺跡発掘調査概要』立山町教育委員会
- 木田 清・前田清彦 1988 「第V章 落干の考察」『松任市八田小瀬遺跡』松任市教育委員会
- 〔ク〕久々忠義 1982 「VI江上A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編—』上市町教育委員会
久々忠義 1984 「II-B弥生時代の時期区分」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品・総括編(本文)一』上市町教育委員会
久々忠義 1986 「富山県出土の漆器について」『大境』第10号 富山考古学会
- 〔サ〕酒井重洋 1979 「1 辻遺跡」『立山町埋蔵文化財予備調査一覧』富山県教育委員会
酒井重洋 1982 「III正印新遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編—』上市町教育委員会
- 〔タ〕立山町教育委員会 1987 「辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要」
立山町教育委員会 1990 「辻遺跡-第2次発掘調査報告書-」
- 〔ハ〕橋本澄夫 1973 「北陸」『弥生土器II』ニューサイエンス社
橋本正春 1981 「2 神田遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町造構編—』上市町教育委員会
橋本 正 1972 「第1部 小杉町岡山遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告書II』富山県教育委員会
- 〔ヒ〕東森市良 1973 「山陰 IV 後期の土器」『弥生土器I』ニューサイエンス社
- 〔マ〕正岡睦夫 1986 「4-3 四線文・擬四線」『弥生文化の研究』3 雄山閣
- 〔ミ〕宮田進一 1981 「7 江上B遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町造構編—』上市町教育委員会
宮田進一 1984 「E江上B遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品・総括編(本文)一』上市町教育委員会
- 〔ヤ〕安田良栄 1977 「郷土のあけぼの」『立山町史』上巻



図版2

1. 調査区全景
(西から)



2. 溝01
(南から)



3. 溝02
(北西から)



図版3

1. 土器ダマリ
検出状況



2. 一括出土土器



3. 作業風景



図版 4

包含層
(約 $\frac{1}{2}$)



図版5

包含層
(約1/2)



図版6

包含層
(約1分)



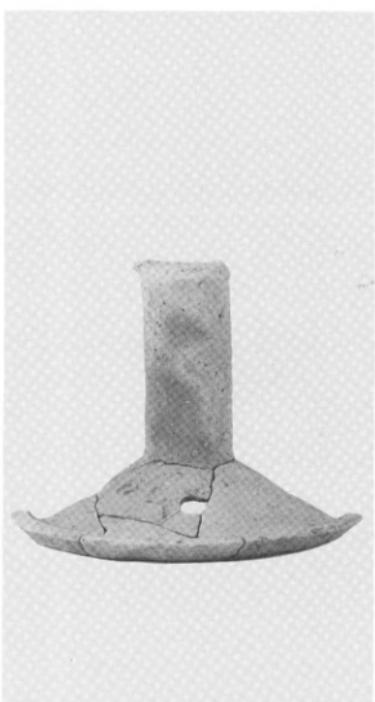
図版7

包含層
(約1/2)



図版8

包含層
(約1/2)



図版9

包含層
(約1/2)

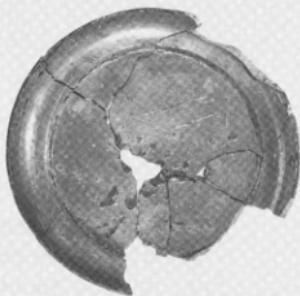


穴-01
(約 $\frac{1}{2}$)



図版11

穴-01
(約 $\frac{1}{2}$)



辻 遺 跡

第3次発掘調査報告

立山町文化財調査報告書 第14冊

発行日 平成3年3月30日

編集行 立山町教育委員会

印刷 日興印刷株式会社

